

# 久宝寺遺跡

—久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会







溝01 上層 出土遺物



溝01 下層 出土遺物



## 序 文

久宝寺遺跡は、八尾市の中西部および大阪市と東大阪市にまたがる、東西約 1.7km、南北約 1.5kmにわたる縄文時代後期から近世までの複合遺跡です。遺跡の発見は、昭和 10（1935）年にさかのぼります。これまでに近畿自動車道建設に伴う発掘調査をはじめ、多くの調査がおこなわれ、弥生時代から古墳時代の集落跡、古墳時代前期の方墳群などが見つかっており、なかでも、古墳時代前期の溝から出土した準構造船は特筆すべきものです。また、古墳時代の遺物の中には、吉備や山陰のみならず南関東、朝鮮半島の系譜をもつ土器が出土しており、これらの資料は、本遺跡に暮らした人びとが遠隔地と交流していたことを考えさせるものです。

今回の調査は、久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査で、平成 30 年度に実施したものです。調査の結果、古墳時代前期の水田畦畔、古墳時代中期・後期の土坑、平安時代の溝が検出されました。平安時代の溝からは、土馬や緑釉陶器の皿、大量の黒色土器の碗がほぼ完形で出土しました。これらは、地域の歴史を明らかにしていくうえで、貴重な調査成果になるものと考えられます。

調査の実施にあたり、大阪府都市整備部公園課および関係各位に多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたします。今後とも、府内の文化財保護行政により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和 2 年 3 月

大阪府教育庁文化財保護課長  
大野 広



## 例 言

1. 本書は、久宝寺緑地整備事業に伴い実施した八尾市西久宝寺地内に所在する久宝寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府都市整備部長から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、平成30年度に調査事業グループ主査 山田隆一を担当者として実施した。調査期間は平成30年11月から平成31年2月までである。また整理作業は、令和元年度に調査事業グループ主査 藤田道子、調査管理グループ専門員 阪田育功を担当者として実施した。
4. 本調査の整理番号は「18036」である。
5. 本調査の写真測量は株式会社 アクセスに委託した。
6. 出土した遺物の写真撮影は、イトーフォトに委託した。
7. 発掘調査及び整理作業にあたっては、地元自治会、八尾市教育委員会、公益財団法人 八尾市文化財調査研究会、大阪府都市整備部公園課、大阪府八尾土木事務所都市みどり課の協力を得た。
8. 本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
9. 本文の執筆は、第1章、第3章第1節、第2節(第1・2面遺構部分)については調査事業グループグループ長 井西貴子が、第2章については調査事業グループ技師石田尚子が、第3章第2節(遺物)については藤田が、第3章第2節第3面については山田が、第4章については山田、藤田が行った。
10. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。

## 凡 例

1. 本書に用いた標高は、東京湾標準潮位(T.P. 値)による。座標値は、世界測地系平面直角座標第IV系によるもので、方位は座標北を示す。
2. 土層の記載に用いた色調は、『新版 標準土色帖(20版)』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)1997. 9によった。

# 久宝寺遺跡

- 久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査 -

序 文  
例 言  
凡 例  
目 次

本文目次

## 第1章 調査に至る経緯・経過と方法

第1節 調査に至る経緯・経過	1
第2節 調査の方法	2

## 第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

## 第3章 調査成果

第1節 基本層序	6
第2節 遺構と遺物	8
(1) 第1面	8
(2) 第2面	
【平安時代】	9
【古墳時代】	23
(3) 第3面	37

第4章 まとめ	43
---------	----

抄録

# 挿図目次

第1図	調査地位置図	1
第2図	調査区地区割図	2
第3図	久宝寺遺跡周辺遺跡分布図	4
第4図	既往調査位置図	5
第5図	東壁土層断面図	6
第6図	南壁土層断面図	7
第7図	第1面出土遺物	9
第8図	第2面全体平面図	10
第9図	溝01上層遺物出土状況図(北半)	11
第10図	溝01上層遺物出土状況図(南半)	12
第11図	溝01下層遺物出土状況図	13
第12図	溝01土層断面図	14
第13図	溝01上層出土遺物(1)	18
第14図	溝01上層出土遺物(2)	19
第15図	溝01上層出土遺物(3)	20
第16図	溝01上層出土遺物(4)	21
第17図	溝01下層出土遺物	22
第18図	土坑8・25土層断面図	23
第19図	土坑8・25・27、ピット32・33・59、溝21・22出土遺物	24
第20図	土坑14平面図・土層断面図	25
第21図	土坑14出土遺物	26
第22図	落込み26(土坑26)・土坑30土層断面図	29
第23図	落込み26(土坑26)出土遺物(1)	31
第24図	落込み26(土坑26)出土遺物(2)	32
第25図	落込み26(土坑26)出土遺物(3)	33
第26図	土坑30出土遺物	34
第27図	土坑57平面図・土層断面図	36
第28図	土坑57出土遺物	37
第29図	第3面全体平面図	38
第30図	第3面畦畔他土層断面図	40
第31図	洪水層・第3面水田・水田ベース土出土遺物	42
第32図	今回の調査地と2006年度の調査地、屋敷地と壕	44



# 図版目次

- 図版 1 調査区(第2面)全景 (上が南)
- 図版 2 土層断面  
上 南壁断面(北から)  
下 西壁断面(東から)
- 図版 3 溝01  
上 上層遺物検出状況(北から)  
下 断面(南から)
- 図版 4 溝01 遺物出土状況  
上左 上層(北から)  
上右 上層(南から)  
下左 下層(北から)  
下右 下層(南から)
- 図版 5 遺構  
上 溝01下層遺物出土状況  
下 溝01、溝20、土坑08、土坑57、  
土坑14下層掘削状況(南から)
- 図版 6 遺構  
上 土坑14、土坑57、土坑08  
掘削状況(北から)  
下 土坑14(南から)
- 図版 7 遺構  
上 土坑57遺物出土状況(南から)  
下 土坑08掘削状況(東から)
- 図版 8 遺構  
上 土坑30掘削状況、ピット32・33  
検出状況(東から)  
中 土坑61掘削状況(東から)  
下 落込み26(土坑26)掘削状況  
(南西から)
- 図版 9 調査区(第3面)全景  
上 (南西から)  
下 (南から)
- 図版 10 土層断面・遺構  
上 南壁断面(北西から)  
中 大畦畔301断面(北から)  
下 土手302(東から)
- 図版 11 遺構  
上 土手302突出部(西から)  
中 土盛303・304(北東から)  
下 土盛303(南から)
- 図版 12 溝01上層出土遺物(1)
- 図版 13 溝01上層出土遺物(2)
- 図版 14 溝01上層出土遺物(3)
- 図版 15 溝01上層出土遺物(4)
- 図版 16 溝01上層出土遺物(5)
- 図版 17 溝01上層出土遺物(6)
- 図版 18 溝01下層出土遺物
- 図版 19 土坑30・土坑14出土遺物
- 図版 20 溝21・落込み26(土坑26)他出土遺物
- 図版 21 落込み26(土坑26)・土坑57出土遺物
- 図版 22 古墳時代前期水田関係出土遺物

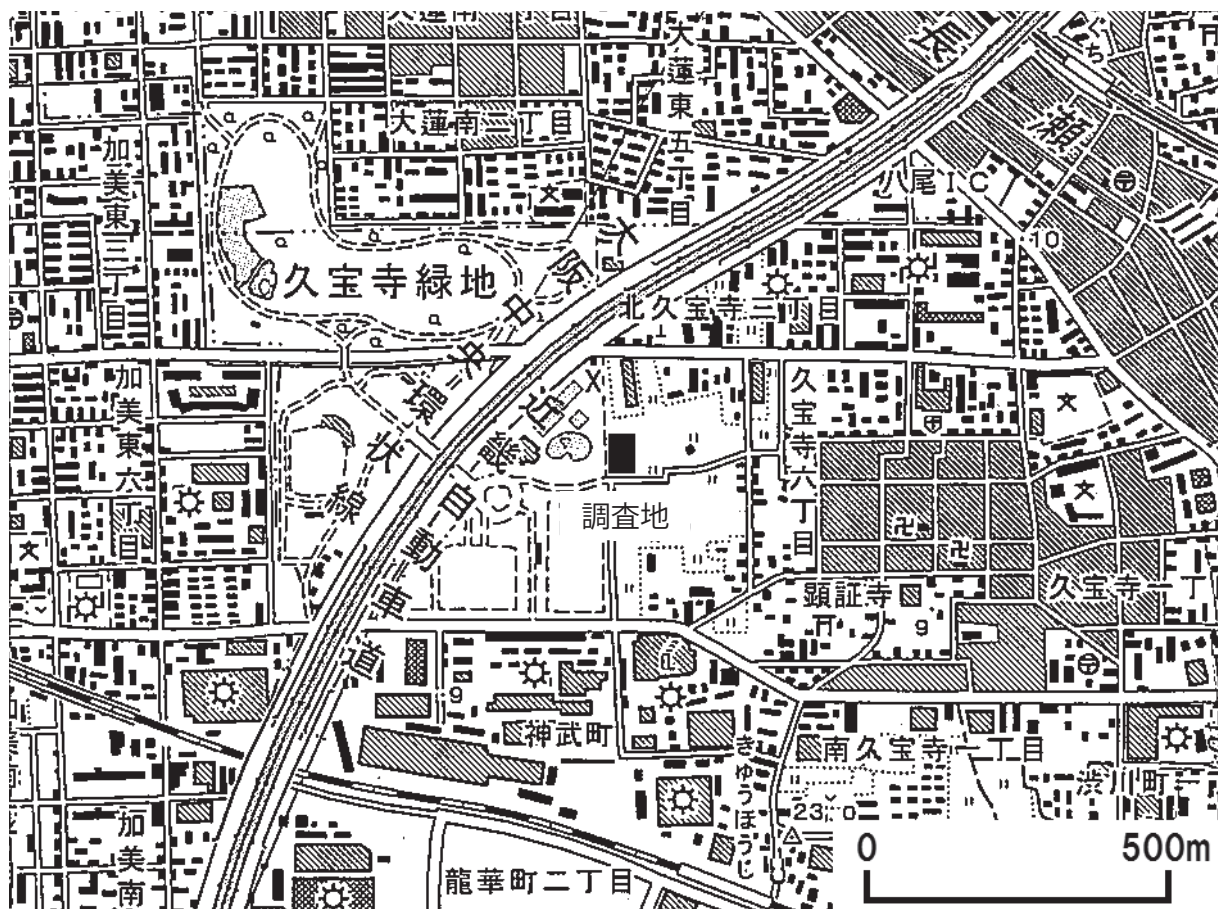


# 第1章 調査に至る経緯・経過と方法

## 第1節 調査に至る経緯・経過

平成27年6月に、都市整備部公園課より文化財保護課に対し、「久宝寺緑地事業認可区域の整備」事業を実施するとの協議依頼があった。協議内容としては、事業認可区域のⅠ期(展望広場)の基盤整備に向けての基本設計が平成27年度、実施設計を平成28年度、工事の実施は平成29年度とのことであり、掘削を伴う構造物は、雨水貯留槽並びに埋設管部分との内容であった。いずれにせよ当該地が久宝寺遺跡の範囲内にあること並びにその重要性を説明するとともに、発掘調査の必要性を説明した。しかし、当該地は周辺での調査例が少ないことから、構造物を建設する位置を示した図面を早急に提示してもらい、建設位置を確認した上で、発掘調査に向けてどのような方法をとるのか判断することとした。

上記の協議を受け、平成27年7月に図面が提示された。面積は、貯水槽部分が1125㎡でボックスカルバート部分が37.2㎡、掘削深度は、貯水槽部分がT.P. + 5.3m、ボックスカルバート部分がT.P. + 4.0mとのことであった。建設位置が確定したため遺構面の状況と基本層序を確認するための確認調査を実施することとした。



第1図 調査地位置図

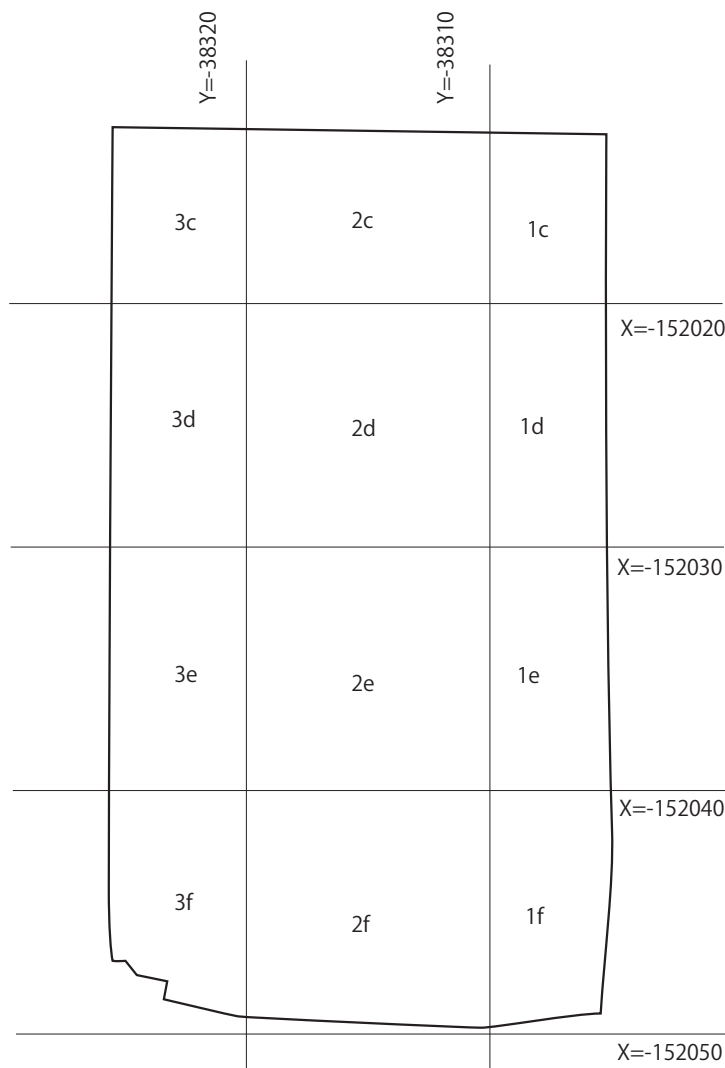
平成28年4月に試掘調査の初回協議を行った。確認調査位置は、実際貯水槽が建設される位置がかなり土盛りされていたことから、土盛りのない北側で実施することとした。確認調査は8月に実施した。その結果を基に、T.P. +6.4 mまで機械掘削(80 cm)、その下を人力掘削(約1.15 m、ボックスカルバート部分はさらに0.75 m下げる)とする旨を伝えた。期間については、人力掘削土量から考えて、約5カ月が必要となると回答した。まず、付帯工事から入るとのことであったので、遅くとも10月には調査に入りたい旨を伝えた。調査の最終掘削深度は、工事掘削のおよぶT.P. +5.3 mまでとした。

実際の調査は、平成30年11月1日から開始し、矢板の設置がなくなったことから調査地が南側に移動する工事内容の変更があったが、平成31年2月28日に終了した。

## 第2節 調査の方法

### 地区設定

調査区は南北がX=-152010～X=-152050、東西がY=-38330～Y=-38300の範囲にある。調査時には、これらの世界測地系による座標を基軸にして小区画を設定した。小区画は、東西方向は東から1、2、



3と番号を付し、南北方向は北からアルファベットのc、d、e、fと番号を付し、それぞれを番号とアルファベットを組み合わせ1c、2c～2f、3fと呼称し、遺構図、遺物の取り上げ作業を実施した(第2図)。

### 遺構番号

検出した遺構は、遺構の種類に関係なく通し番号を付し、整理の段階で遺構の性格がわかるものについては番号の前に遺構の性格を示した。また、第3面については、遺構番号は301から付した。

撮影については6×7 cm版及びデジタルカメラを併用した。また作業の効率化を図るため遺構面全体の写真や図面についてはトラッククレーンによる空中写真測量を実施している。

第2図 調査区地区割図

## 第2章 地理的・歴史的環境 (第3・4図)

### 第1節 地理的環境

久宝寺遺跡の所在する大阪府八尾市は、大阪府の中東部に位置し、本遺跡は八尾市域の西端に位置している。遺跡の周辺を大きく見ると東部に標高 488 m の高安山をはじめとする生駒山地が南北に走り、南には羽曳野丘陵が、西には北に延びる上町台地がある。それら高所に囲まれた河内平野の南部に位置する。また、遺跡は大和川の主流であった平野川と長瀬川に挟まれた沖積地に位置している。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には多くの遺跡が存在し、数多くの調査が実施されている。以下に、既往の調査について記す。

**縄文時代** 1987年『久宝寺北』(註1)の調査で確認された自然流路から晩期最終末の土器が出土している。1987年『久宝寺南(その1)』(註2)の調査でも自然流路が確認されており、河川内から北白川下層式、滋賀里Ⅱ・Ⅲ式、長原式の土器が出土している。

**弥生時代** 『久宝寺北』の調査では、中期・後期、二面の遺構面が検出されている。『久宝寺南(その1)』の調査でも弥生時代の遺構が検出され、微高地に集落、微高地の縁辺に墓域、低地に水田と、土地利用が区別されていたことが確認された。その他、本調査区南東では、『久宝寺遺跡(第二次調査)』(註3)の調査が実施され、河川が検出されている。また、河川は、その北に位置する『久宝寺遺跡(2001-271)』(註4)の調査でも確認されている。

**古墳時代** 『久宝寺北』では、長瀬川の前身河川と考えられる川幅約 150 m からなる前期の自然流路が検出されている。その河川ををさんで両側に前期・中期の居住域が確認されている。前期の居住域からは、山陰系、西瀬戸内海系などの搬入土器、中期には、土師器・須恵器のほかに韓式系土器の甌、器形が陶質土器に類似する黒色研磨土器の蓋などが出土している。

**奈良・平安時代** 『久宝寺北』の調査では、7世紀から10世紀にかけての集落域が検出された。水田畦畔の方向は現地表面で観察される方向とほぼ一致することから条里制施行が本時期まで遡る可能性が指摘されている。『久宝寺南(その1)』の調査では、平安時代の居住域や7世紀後半から8世紀にかけての居住域が検出されている。また、本調査区の西側約 15m の位置で実施された 2006 年度の大阪府による調査(註5)では、平安時代の堀立柱建物が検出されている。

(註)

(1) (財)大阪府文化財センター 1987『久宝寺北(その1～その3)』

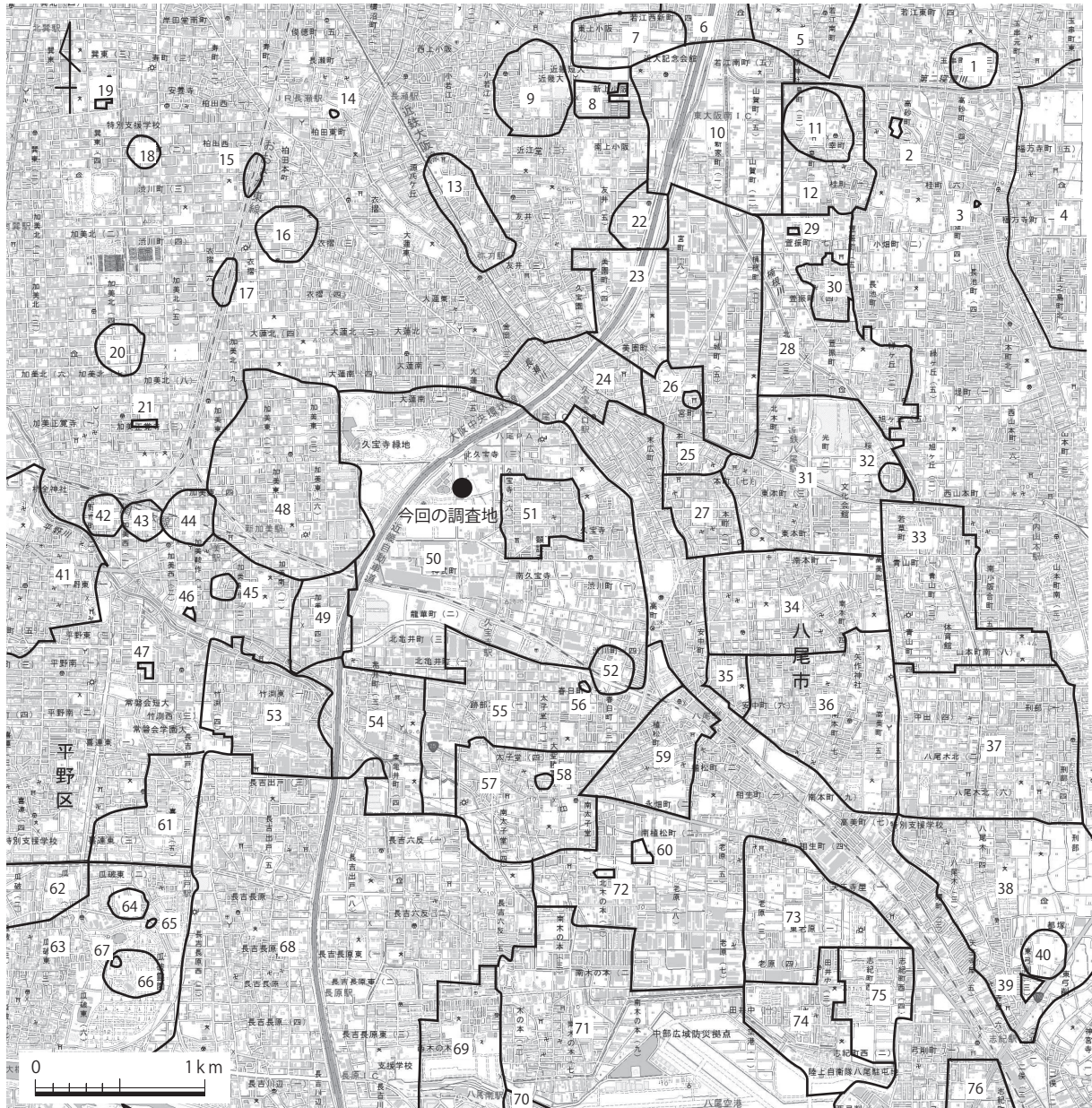
(2) (財)大阪府文化財センター 1987『久宝寺南(その1)』(財)大阪府文化財センター 1989『久宝寺南(その2)』

(3) (財)八尾市文化財調査研究会 1988『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』

(4) 八尾市教育委員会 2002『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ』

(5) 大阪府教育委員会 2007『加美・久宝寺遺跡発掘調査概要』

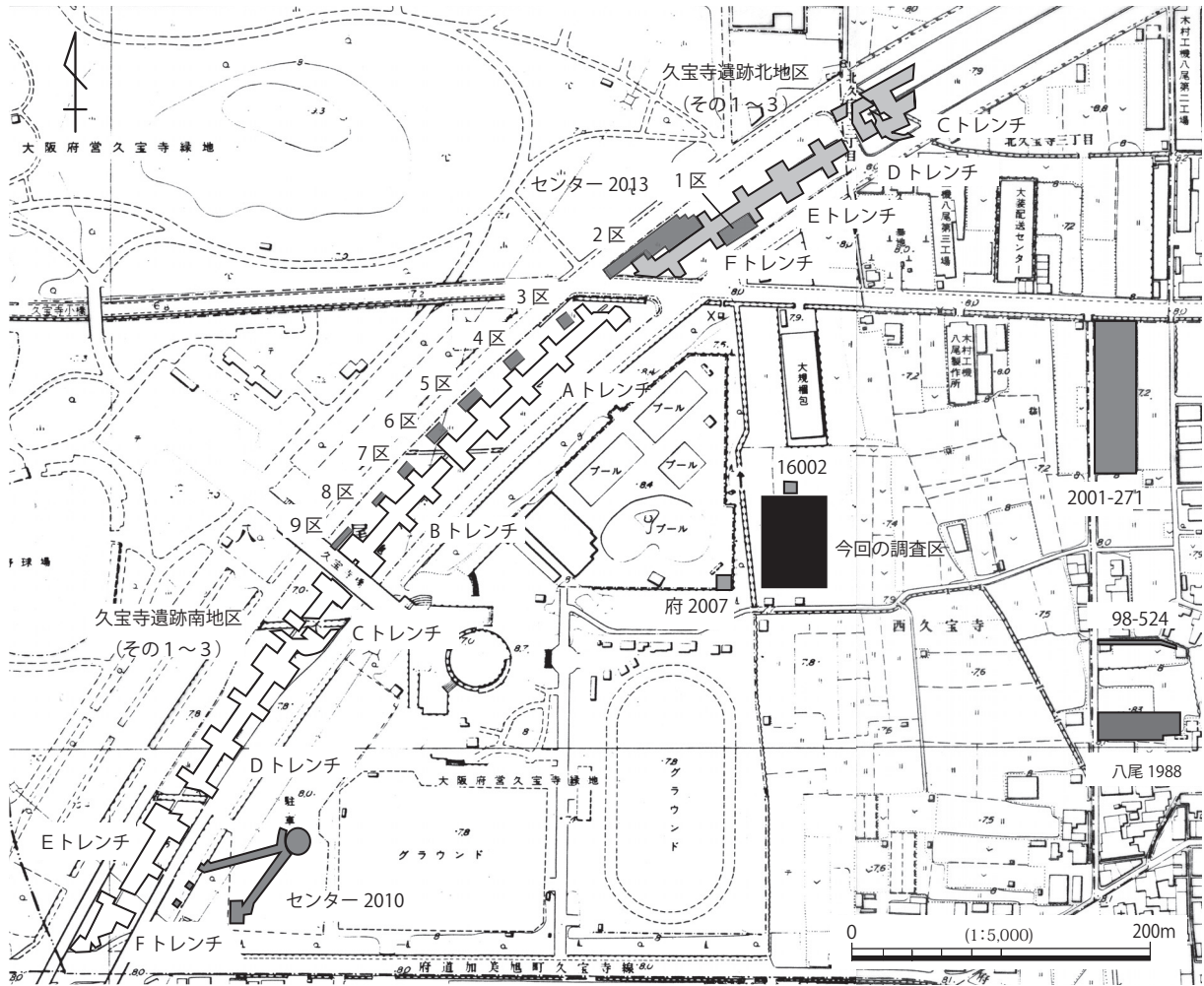




- |             |              |               |             |              |
|-------------|--------------|---------------|-------------|--------------|
| 1 玉串遺跡      | 16 衣摺遺跡      | 31 東郷遺跡       | 46 加美鞍作遺跡   | 61 喜連東遺跡     |
| 2 高砂町遺跡     | 17 亀田遺跡      | 32 東郷廃寺       | 47 竹洲西4丁目遺跡 | 62 瓜破北遺跡     |
| 3 池島・福万寺遺跡  | 18 西郷遺跡      | 33 成法寺遺跡      | 48 加美遺跡     | 63 瓜破遺跡      |
| 4 山本町北遺跡    | 19 巽東3丁目所在遺跡 | 34 龍華寺跡       | 49 亀井北遺跡    | 64 成本廃寺      |
| 5 若江遺跡      | 20 加美北遺跡     | 35 矢作遺跡       | 50 久宝寺遺跡    | 65 花塚山古墳     |
| 6 若江北遺跡     | 21 加美正覚寺遺跡   | 36 小阪合遺跡      | 51 久宝寺寺内町   | 66 瓜破廃寺      |
| 7 上小阪遺跡     | 22 友井東遺      | 37 中田遺跡       | 52 渋川廃寺     | 67 ゴマ堂山古墳    |
| 8 新小阪遺跡     | 23 美園遺跡      | 38 東弓削遺跡      | 53 竹洲遺跡     | 68 長原遺跡      |
| 9 小若江遺跡     | 24 佐堂遺跡      | 39 弓削寺跡       | 54 亀井遺跡     | 69 八尾南遺跡     |
| 10 山賀遺跡     | 25 宮町遺跡      | 40 由義寺跡       | 55 跡部遺跡     | 70 太田遺跡      |
| 11 西郡廃寺     | 26 穴太廃寺      | 41 平野環濠都市遺跡   | 56 銅鐸出土地    | 71 木の本遺跡     |
| 12 西郡遺跡     | 27 八尾寺内町     | 42 平野寺前遺跡     | 57 太子堂遺跡    | 72 北木の本二丁目遺跡 |
| 13 弥刀遺跡     | 28 萱振遺跡      | 43 加美西1丁目所在遺跡 | 58 勝軍寺跡     | 73 老原遺跡      |
| 14 法明上人有馬御廟 | 29 萱振一号墳     | 44 長楽寺跡       | 59 植松遺跡     | 74 田井中遺跡     |
| 15 弓削ノ庄遺跡   | 30 萱振寺内町     | 45 鞍作廃寺       | 60 植松南遺跡    | 75 志紀遺跡      |
|             |              |               |             | 76 弓削遺跡      |

第3図 久宝寺遺跡周辺遺跡分布図 (1/40000)





第4図 既往調査位置図

その他参考文献

- 大阪府教育委員会 2017 『大阪府教育庁文化財調査事務所年報 21』
- (公財) 大阪府文化財センター 2013 『久宝寺遺跡 2』
- (公財) 八尾市文化財調査研究会 2014 『考古資料からみる八尾の歴史』
- (財) 大阪府文化財センター 2003 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V』
- (財) 大阪府文化財センター 2007 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII』
- (財) 大阪府文化財センター 2010 『久宝寺遺跡』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 1988 『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 1993 『財団法人 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 39』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2006 『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 89』
- 八尾市教育委員会 2000 『八尾市内遺跡 平成11年度発掘調査報告書II』
- 八尾市史編纂委員会 2017 『新版八尾市史 考古編1』

## 第3章 調査成果

調査地の面積は、南北方向の上場が 36 m、下場で 32.5 m、東西方向の上場が 32.5 m、下場で 16.5 m であり、上場面積が 756㎡、下場の面積が 536㎡である。

調査地周辺は、もともと島畠を営んでいたようで、当調査地を含めた広範囲に島畠の痕跡が見取れた。盛土と島畠を含めた旧耕土までは機械によって掘削し、第Ⅱ層以下を人力によって掘削した。

### 第1節 基本層序 (第5、6図・図版2、10)

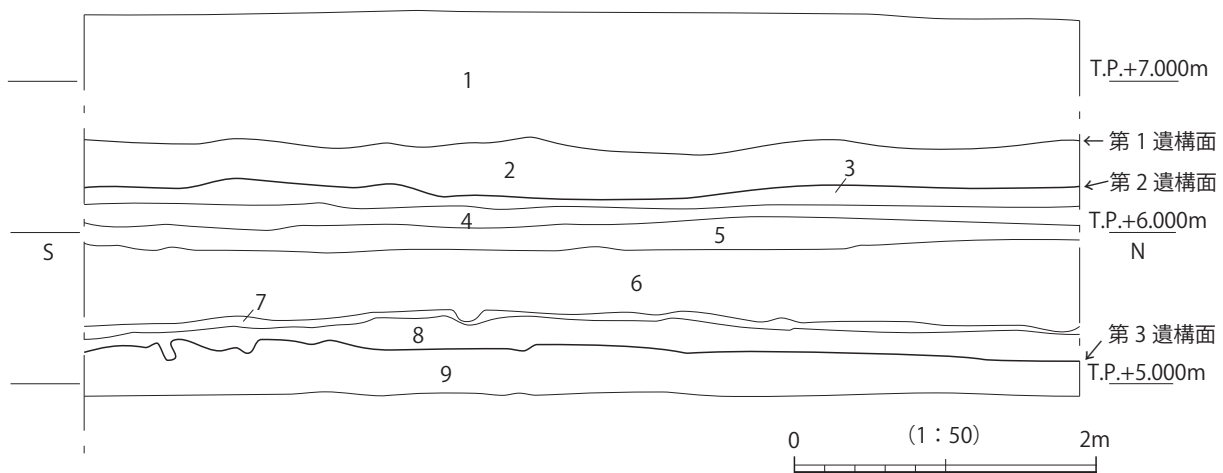
ほぼ東西南北に沿った長方形の調査区であったことから、南側と西側の壁面で断面図を作成した。以下、南壁断面の第5図で記す。

0層：盛土 (1)

Ⅰ層：現代耕土 (2) 盛土を外した調査区全体に堆積する層である。部分的に攪乱されている箇所もあるが、島畠廃絶後の耕作に利用したものと考えられる。層厚は 10 cm～20 cm で、T.P.+6.8～6.9 m である。

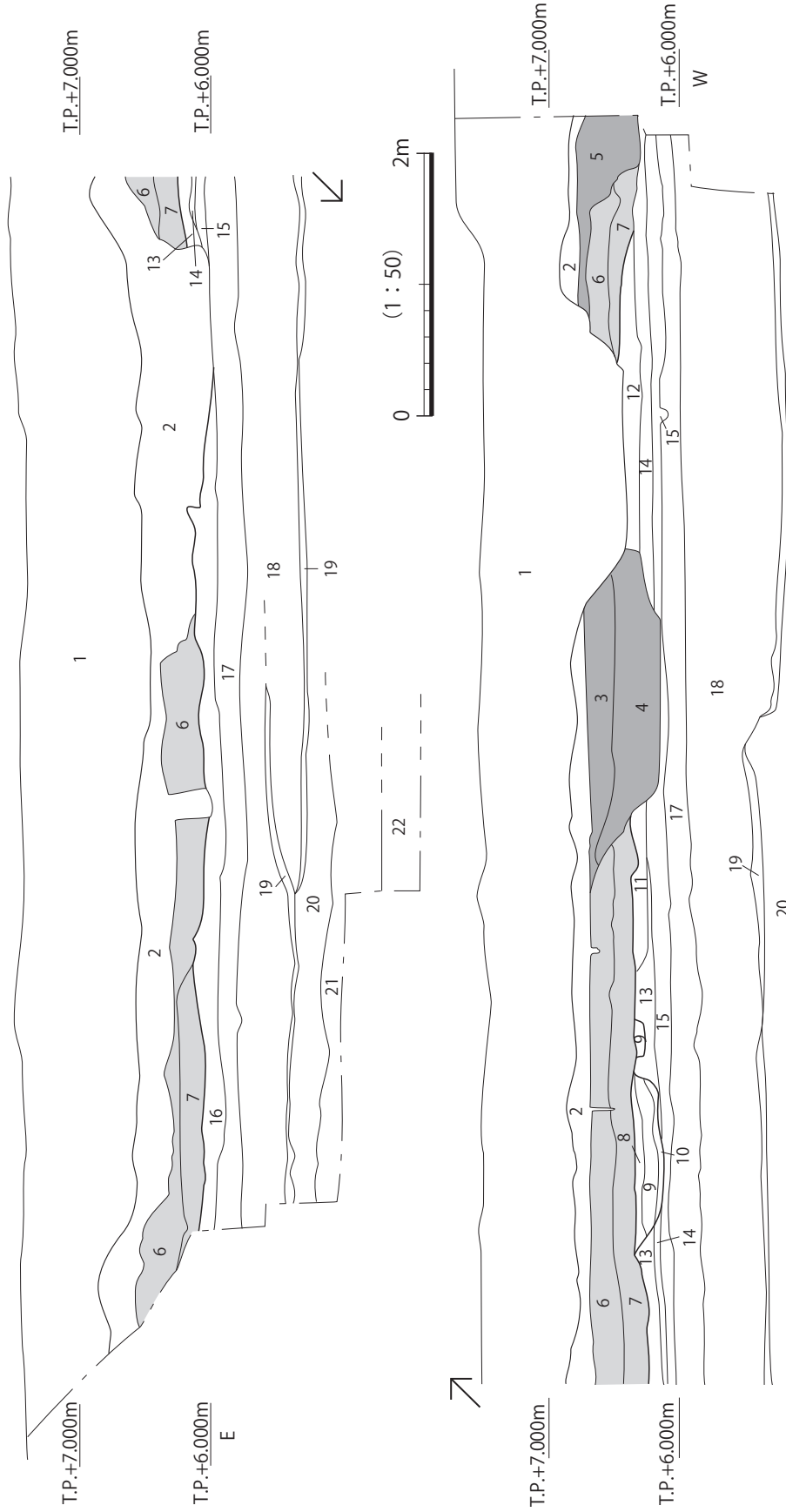
Ⅱ層：包含層 1 (12～16) いずれの土層も古墳時代から平安時代の遺物を包含し、上面は第2面である。細分は可能であるが明確な時期差が存在するわけではない。上面は後世に大きく削平を受け、古墳時代の遺構と平安時代の遺構が同一面で確認された。層厚は 10～30 cm で、上面は T.P.+6.3 m で検出した。

Ⅲ層：包含層 2 (17) 褐灰色粘土層の単一層で、水平堆積である。調査区全体に確認され、耕作土の可能性はあるが、畦畔などの遺構を検出することはできなかった。



1. 盛土 2. 島畠作土 褐灰色 (7.5YR6/1) 土 3. 明褐色 (7.5YR5/8) 弱粘質土、マンガン著しい
4. 褐灰色 (7.5YR5/1) 弱粘質土 5. 褐灰色 (10YR4/1) シルト質粘土
6. 褐色、橙色、灰白色、赤褐色を程する、シルト、微砂、細砂、粗砂、ラミナ
7. 灰褐色 (7.5YR6/2) 粘質シルト、ラミナを形成
8. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土の自然堆積に褐灰色 (10YR6/1) 粗砂シルト、ラミナ 9. 黒褐色 (10YR3/1) 粘土

第5図 東壁土層断面図



- |                                  |                                 |                            |
|----------------------------------|---------------------------------|----------------------------|
| 1. 盛土                            | 9. 土坑 60 の埋土・溝 09 の埋土           | 15. 黄橙色 (10YR7/8) シルト混じり土  |
| 2. 現代耕土                          | にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土、マンガン著しい      | 16. にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルト   |
| 3. 褐灰色 (10YR5/1) 土               | 10. 土坑 60 の埋土 黄褐色 (10YR5/8) シルト | 17. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土       |
| 4. 褐灰色 (10YR6/1) 弱粘質土            | 11. 褐色 (7.5YR4/4) 土、マンガン著しい。    | 18. 西壁と同じ洪水層               |
| 5. 灰黄色 (2.5Y6/2) 土               | 12. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土、マンガン著しい  | 19. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト、ラミナ |
| 6. 島島作土 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 土       | 13. 褐色 (10YR4/6) シルト土、マンガン著しい   | 20. 黒褐色 (10YR3/1) 粘土       |
| 7. 島島作土 2 にぶい黄橙色 (10YR7/3) 弱粘質土  | 14. 明褐色 (7.5YR5/6) 土、上面赤変       | 21. 灰色 (5Y6/1) シルト         |
| 8. 土坑 60 の埋土 灰白色 (10YR7/1) シルト質土 |                                 | 22. 黄橙色 (10YR7/8) 砂・粗砂     |

第6図 南壁土層断面図

層厚約5～15 cmで、上面はT.P.+6.0 mである。ほとんど遺物を含まない。

IV層：洪水層（18） 調査区全体に層厚40～80 cmの厚さで堆積する砂層（褐色・橙色・灰白色・赤褐色を呈するシルト・微砂・細砂・粗砂）である。下面に10 cmほど灰黄褐色ラミナ・シルト層が堆積する。弥生時代から古墳時代前期の土器が出土した。

V層：水田層（20） 上面は第2面である。水田覆土からは布留式期の遺物が、本層内からは弥生時代中・後期の遺物が出土した。

## 第2節 遺構と遺物

以下の報告は、第1章第2節で記したこの小区画を使用して記載する。

### （1） 第1面

盛土を除去すると公園整備が行われる前まで耕作が継続して水田耕土が確認される。この水田は下層にある島畠を整地して作られたもので部分的に島畠の形状がそのまま残っているところもあった。断面観察によって、島畠部分と溝部分が確認され島畠の作土は二層に分かれる（第5図6 灰黄褐色土、7 にぶい黄橙色弱粘質土）。溝部分も二層に分かれ（3 褐灰色土、4 褐灰色弱粘質土）、調査区内では2条の島畠が確認された。第2面の遺構の検出状況から考えると、この島畠を作るにあたってかなりの土地変化があったものと推定される。島畠部分、溝部分ともに多数の遺物を含む。ほとんどは古墳時代中・後期の遺物である。なお瓦器は全く含まない。

### 出土遺物（第7図）

第1面からはコンテナ約6箱の遺物が出土した。第1面は近世の耕作面できざまな種類の遺物の小片を含んでいる。図化掲載した遺物は11点である。第7図2～5、7・9・11は、島畠作土から、1・8は作土下の近世溝から、6・10は第1面精査中出土した遺物である。

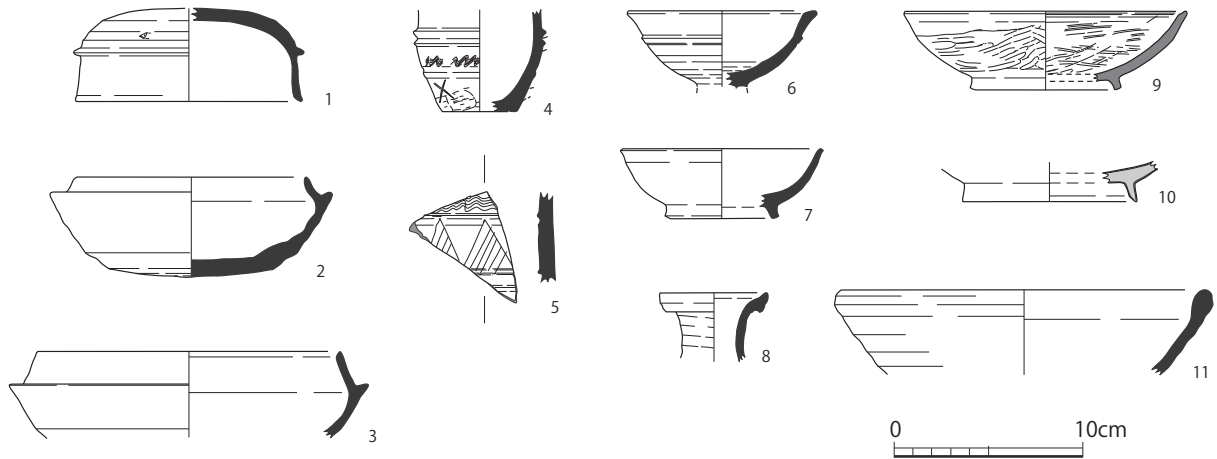
第7図1はI型式2段階の須恵器杯蓋、復原口径12 cm、残存高5 cmを測る。天井部のヘラケズリは口縁部と区切る稜の手前まで施されており、稜は断面三角形で尖る。口縁端部は面を持つ。2・3はII型式2段階の須恵器杯身で、2は口径12 cm、器高5.4 cmを、3は復原口径16 cm、残存高4.6 cmを測る。

4はI型式2段階の須恵器コップ形の鉢で、口縁部と把手は欠損、復原底径4 cm、残存高5.5 cmを測る。外面体部上位に鋭い稜線が2条、下位には浅い沈線がめぐらされておりその間に波状文が施されている。底部との境はヘラケズリが施され、その上に×印の浅いヘラ記号が刻まれている。

5は高杯形器台の杯部小片で、最大長5.9 cm、最大幅5.7 cmを測り、外面に鋸歯文と波状文が施されている。6は須恵器高杯杯部、復原口径10 cm、残存高4.1 cmを測る。杯部は内湾しつつ上外方に伸び、口縁端部は内面に傾く面を持つ。外面口縁部に稜線をめぐらす。杯部内面は自然釉が付着、胎土は緻密で色調は灰白色を呈す。7は須恵器高台付椀、復原口径10.5 cm、残存高3.7 cmを測る。胎土は緻密で色調は灰白色を呈す。8は須恵器瓶の口縁部、口径5.8 cm、残存高3.7 cmを測る。胎土は緻密で色調は灰白色を呈す。

9は黒色土器A類の椀、復原口径15 cm、残存高4.2 cmを測り、内外面に密なヘラミガキが残る。





第7図 第1面出土遺物

10は緑釉陶器の高台部小片で、高台部は貼り付けの輪高台、復原径9.2 cm、残存高2.1 cmを測る。釉薬の色調は明るい緑色、露胎部分の胎土は軟質で色調は淡黄色を呈す。11は平安時代の須恵器鉢口縁部、復原口径19.4 cm、残存高4.5 cmを測る。口縁端部はやや上方にたちあがり、上下に肥厚して丸くおわる。

## (2) 第2面 (第8図・図版1)

### 【平安時代】

ほぼ南北方向に直線的に伸びる溝を2条検出した。

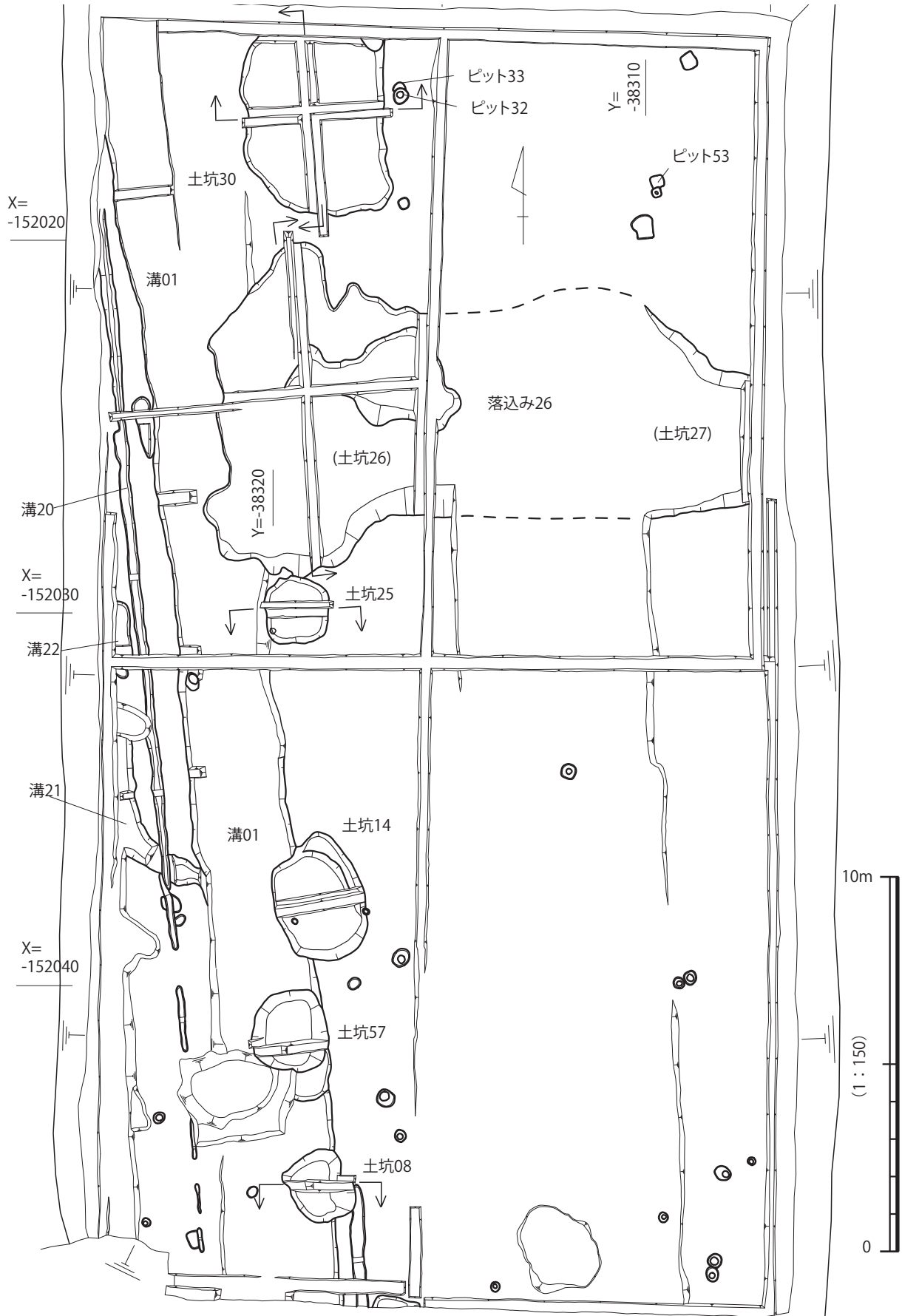
溝01 (第9～12図・図版3～5) 2、3・c～d区で検出した南北方向の溝である。南北ともに調査区外に伸びる。近世以降の耕作によって、北半で東側、南半で西側が破壊されているが、規模は幅2.5 mに復元でき、長さ34 m分を確認した。主軸はほぼ南北に沿っている。本溝の西側、今回の調査区から西に約15 m離れた位置で実施された調査で(大阪府教育委員会2007『加美・久宝寺遺跡発掘調査概要』「久宝寺緑地内における橋梁整備工事及び便所新築工事に伴う調査」)、同時期の建物址が確認されており、東側では明確な遺構が検出されなかったことから本溝は西側の居住域を画する機能をもっていた可能性が高い。埋土は、3層に大別され、全く遺物を包含しない間層(2、3:褐灰色シルト土)をはさんで、上層(1:黒褐色土、層厚約0.1 m)、下層(4:灰褐色粘質土、層厚約10 m)は明確に分離することができ、どちらの層からも多数の10世紀代の土器などが出土した。下層出土の土器は、地山面までくいこんでいるものもあった。

### 出土遺物

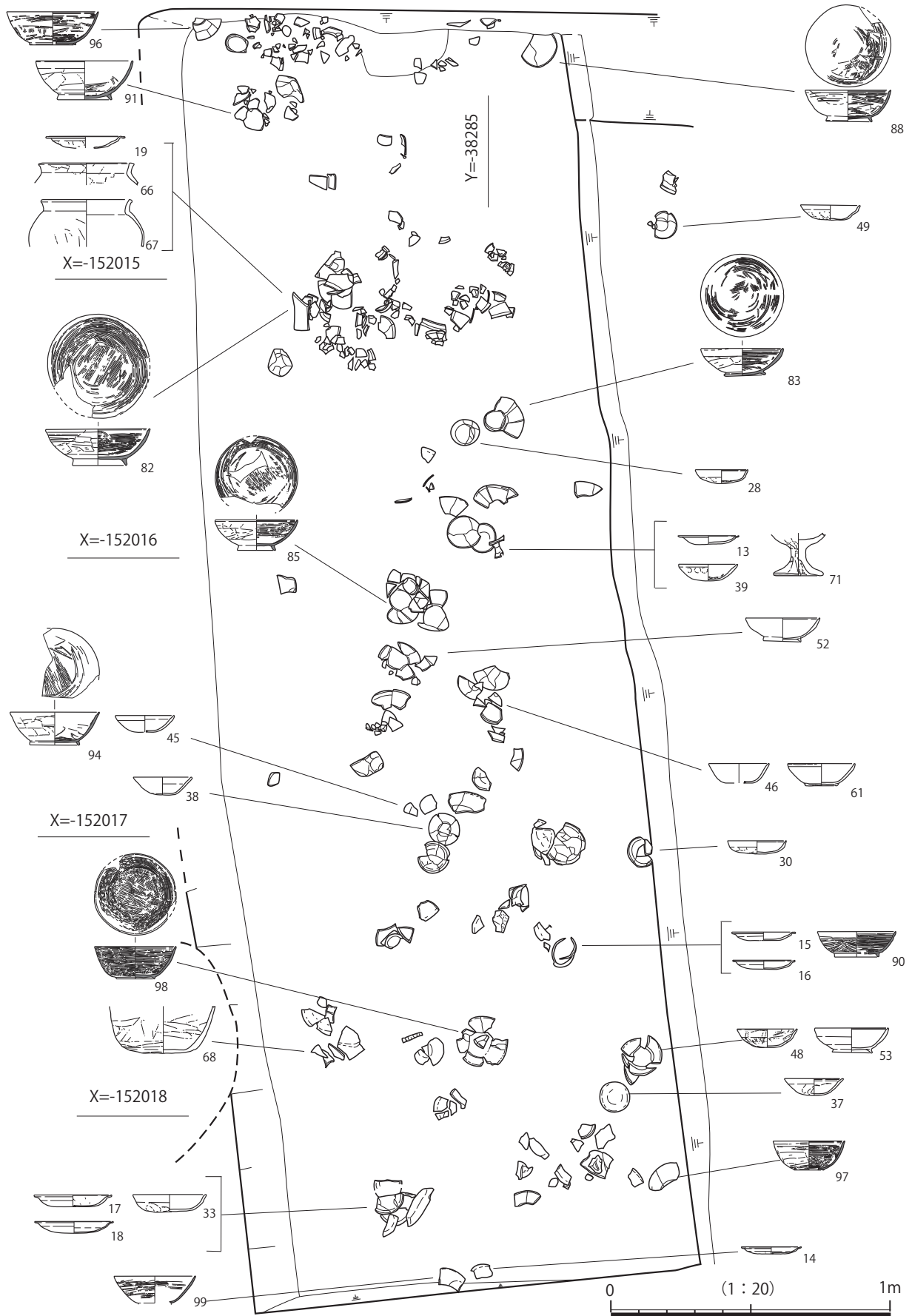
溝01からは、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などが出土した。大半が平安時代の土師器、黒色土器である。出土遺物は上層、下層に分けて詳細を説明する。

### 上層出土遺物 (第13～16図・図版12～17)

溝01上層からはコンテナ約5箱の遺物が出土した。土師器食膳具・煮沸具その他、緑釉陶器、須恵

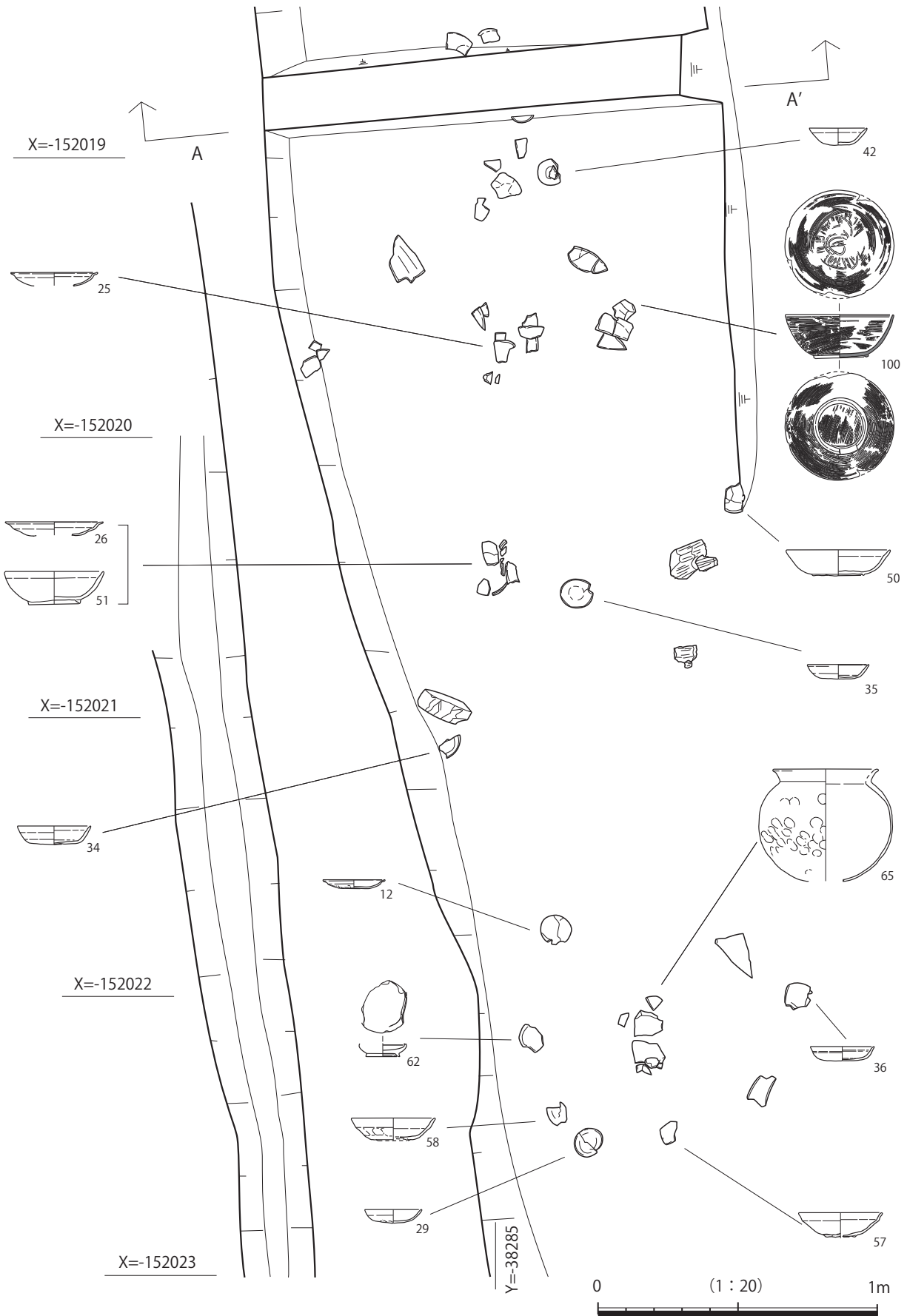


第8図 第2面全体平面図



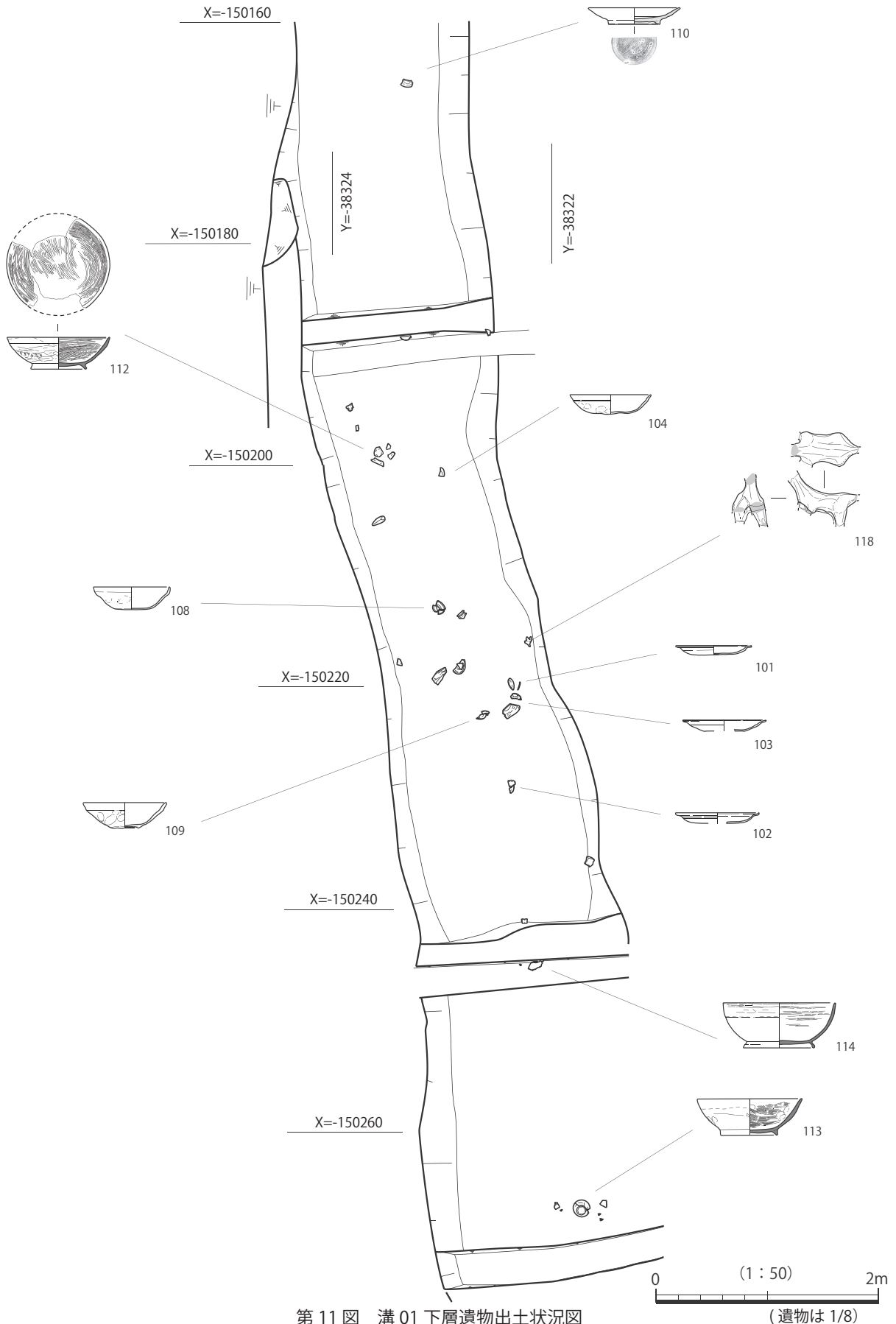
第9図 溝01上層遺物出土状況図(北半)

(遺物は1/8)



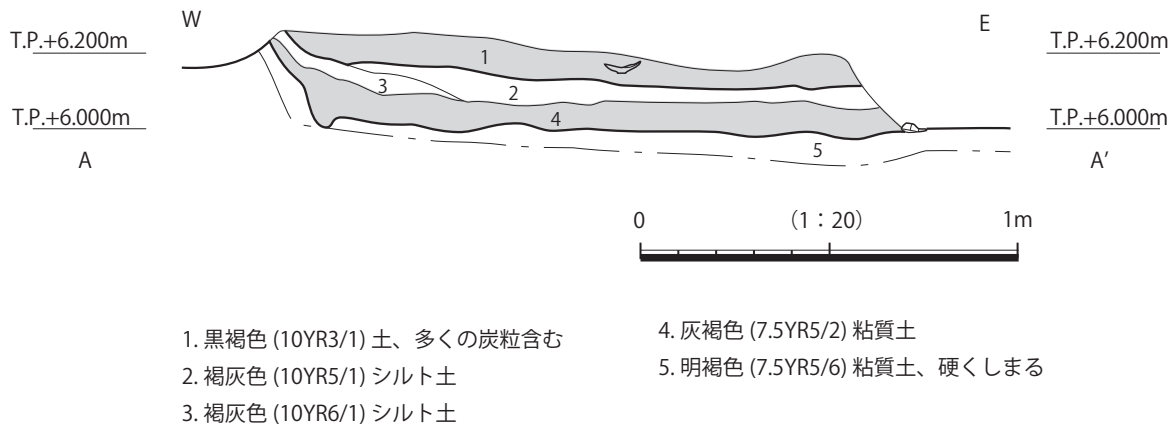
第10図 溝01上層遺物出土状況図(南半)

(遺物は1/8)



第11図 溝01下層遺物出土状況図

(遺物は1/8)



第12図 溝01土層断面図

器、石製品、黒色土器の順に説明する。

土師器食膳具は皿・椀・杯・鉢・高杯などが出土した。

土師器皿は、大きく分けて2タイプあり、ひとつは口縁端部を強くなでるいわゆる「て」の字皿である。図化したものは、第13図12～27の16点で、ほとんどが口径が11～12cmのものであるが、26・27のように口径が14～15cmのやや大きなサイズもある。

もう1タイプの皿は、口縁部が底部より短く上外方にのびる口径10～11cm前後の皿で、図化したものは、第13図28～36の9点で、すべて器高が2.5cm前後を測る。口縁部ははっきりしたヨコナデで外面底部は指おさえ痕が残る。32・33はヨコナデが強く口縁部が外反気味である。

椀は、皿に比べると器の深さがあり口径10cm、器高3cm前後を測る。口縁部は底部より一気に上外方に伸び、外面体部にはその時に施された指おさえ痕が残る。図化したものは、第13図37～49の13点で、37・41のように口縁端部内面に浅い沈線をもつものや、40・49のように口縁部のヨコナデが強く端部が屈曲するものもある。

杯は、貼り付け高台が不整形なものが多い。図化したものは、第13図50～61の12点で、口径の大きさにより大きく三種類に分けることができる。50・51は口径が14～15cmを測る。50は内湾しつつ上外方にのびる体部をもつが、貼り付けられた高台は不整形で高さがほとんどない。51も50と同様の形状の体部をもつが、断面三角形の整った高台が貼り付けられている。

52・53は、口径ほぼ13cm、52は断面三角形、53は断面台形の整った貼り付け高台をもつ。2点共体部は内湾しつつ上外方にのび、口縁端部に内傾沈線を持つ。

56～59は、口径が13cm未満で、貼り付け高台は不整形で途切れている箇所もある。4点共体部は上外方にのびたあと、口縁部に強いヨコナデが施され端部がやや屈曲している。体部外面には成形時の指おさえ痕が残る。

55は、復原口径11.8cm、器高3.2cmを測り、直径5.2cm、断面三角形で高さのある貼り付け高台がつくが、杯部の形状が皿に近い。

土師器高杯は、第14図71 1点のみ図化した。小高杯の基部から脚部で、脚部底径7.1cm、残存高6.2cmを測る。全体を手づくね、ナデ調整でしあげており、脚部内面は未調整である。



土師器鉢は第14図70の把手付鉢の把手部、78の大型の鉢2点を図化した。70の把手部は、残存長9cmを測り、断面はやや扁平な楕円形、先端は尖る。78の鉢は、復原口径38cm、残存高11.1cmを測り、上外方にまっすぐのびる体部をもち、口縁部はやや外反し、端部は面を持つ。

土師器煮沸具は、甕・移動式カマド・羽釜等が出土している。

土師器甕は図化したもの4点、第14図65は底部は一部欠損、66・67は口頸部から体部上位、68は底体部のみ残存である。65は復原口径15.1cm、残存高16.2cmを測り、球形の体部から短く外反する口縁部をもち、端部は丸くおわる。体部外面には指おさえ痕が残り、外面全体に煤が付着している。66は口頸部のみ残存、復原口径12.5cmを測る。口縁端部は短く上外方に伸び端部は面を持つ。67は、口頸部から体部上位のみ残存、復原口径12.4cm、残存高6.8cmを測り、口縁部は66と同じで短く上外方に伸び端部は面を持つ。68はやや平底の底体部、底部径7.7cm、残存高は8.6cmを測り、65から67に比べるとやや器壁が厚い。

第14図69は土師質移動式カマドの一部、たき口周囲のつけ庇が一部残存している。

第14図77は土師器羽釜で、復原口径26cm、残存高6cmを測る。頸部下にほぼ横方向にのびる鏝をもち、鏝端面は面をもつ。口縁部は外反し、端部は丸い。

土師器では他に土錘も出土した。すべて紡錘形管状土錘で大きさにより三種類に分けることができる。第14図72・73は共に長さ6cm前後、最大腹径3.9cmを測る。74・75は長さ4cm未満、最大腹径1cm前後の小型土錘である。76は長さ12.7cm、最大腹径3.3cmで5点の中で最も長さが大きい。

緑釉陶器は数点出土し、図化したのは3点である。第14図62は緑釉陶器耳皿で、復原口径10.4cm、残存最大高2.4cmを測る。全体に摩滅が激しい。折り返した口縁部半径は推定4.5cm、復原径6cmの貼り付け高台は有段輪高台、高台内には糸切痕がわずかに残り、露胎部分にみえる胎土は軟質で釉は淡緑色である。63は緑釉陶器小椀、口径11.4cm、器高4.4cmを測る。椀部は内湾しつつ上外方にのび、口縁部は外反し端部は丸くおわる。高台は貼り付けの輪高台で、直径6cmを測る。釉の色調は濃緑色で、内面見込みに重ね焼きによる付着物が残る。64は高台部の一部分、貼り付けられた輪高台は復原径6.4cmを測る。

溝01からは須恵器が出土したが、溝01に本来伴うものではなく、下層の古墳時代の遺構の遺物が混在したものと思われる。上層から出土した須恵器で図化したのは2点である。第14図79はI型式2段階の須恵器杯身、復原口径12.4cm、残存高5cmを測る。外面受部直下まで回転ヘラケズリが施されている。80は高杯形器台の杯部口縁の一部で、復原口径33cm、残存高6cmを測る。口縁部は外反し、端部は下方に肥厚し、面をもつ。外面は緩い稜線で区画され、一条3～4本のゆるやかな波状文が施されている。

石製品は1点、第14図81の砥石を図化した。最大長さ18.4cmを測る砂岩製の砥石で、五面が砥面として使用されている。

黒色土器はA・B類が出土した。図化したのは、第15図82から94の黒色土器A類の椀13点と、第16図95から100の黒色土器B類の椀6点である。

黒色土器A類の椀は、法量、とくに器高に対する口径の割合、形状から3タイプに分けて詳細を説明

する。

第15図82～85・90・93は口径15cm未満、器高は5.5cm未満、断面三角形でハの字形に下外方に開く直径7cm前後の高台をもつタイプである。椀部は内湾しつつ上外方に伸び、82～85は口縁端部内面にはっきりした沈線をもつ。86～89は口径15cm以上、器高5.5cm以上、断面台形で直径7.8cm前後の径の大きい高台をもつタイプである。内湾しつつ上外方にのびる大きく深い椀部をもつ。92・94は86～89と同様深い椀部をもつが、口縁部が上外方にまっすぐ伸びる形状を示すタイプである。

内面の調整は、欠損や摩滅のため完全に判明していないが、図化した13点中10点は内面体部はらせん状ミガキ、見込み部分は一方向のミガキが施されている。外面は幅の広いヘラ状工具でケズリ状ナデが施されているものがほとんどであるが、90のように幅の狭い密なヘラミガキが施されているものもある。

黒色土器B類の椀は、法量により大小2タイプに分けて詳細を説明する。

第16図95～97は小型で、口径が13cm未満、器高は5cm前後を測るタイプ、98～100は大型で口径が14cm以上、器高は6cm前後を測るタイプである。2タイプとも椀部の形状は、内湾しつつ上外方にのび、口縁端部は内傾沈線をもち、断面三角形もしくは台形の高さの低い貼り付け高台をもつ。内面の調整は、体部から口縁部はらせん状、見込み部分は一方向の密なヘラミガキが施されている。外面体部から口縁部は密なヘラミガキが何回かに場所を分けして施されている。高台内には一方向ヘラミガキが残る。97のように外面幅の広いヘラ状工具によるケズリ状ナデが残るものもある。

#### 下層出土遺物（第17図・図版18）

溝01下層からはコンテナ約3箱の遺物が出土した。土師器食膳具、緑釉陶器、黒色土器、須恵器、土製品の順に説明する。

土師器食膳具は、皿・椀・杯等があり、図化したものは9点である。第17図101～103は皿、口径11～12cm、器高1.5cm前後を測り、口縁端部を強くなで、「て」の字状にしている。104は口径11.7cm、器高2.8cmを測る皿、口縁部は短く上外方に伸び端部は丸くおわる。外面底部は指おさえ痕が残り、内面と口縁部はヨコナデで仕上げられている。

105～108は椀、口径10～11cm、器高2.8～3.3cmを測る。底径は6cm前後で、口縁部は上外方にまっすぐ伸び、端部は丸くおわる。外面体部は斜め方向に指おさえ、内面・口縁部はヨコナデで仕上げられている。107・108は口縁部に強いヨコナデが施されており、端部が屈曲している。

109は、口径12cm、器高3.7cmを測る杯で、断面が不整形な不安定な貼り付け高台を持つ。外面体部は斜め方向に指おさえ、内面・口縁部はヨコナデで仕上げられている。

110は緑釉陶器の皿、口径13cm、器高2.4cm、高台径7.4cmを測る。高台内に糸切痕が残存していることから、高台は貼り付けの輪高台であることがわかる。露胎部分の胎土の色調は灰白色で、焼成は硬質である。施釉薬の色調は濃緑色、内面見込み部分に重ね焼きの痕と思われる付着物がみられる。

黒色土器は、A類の椀のみ出土した。図化したものは4点である。111は口径14.6cm、器高4.4cm、器高が低く浅い椀になる。112は口径14.6cm、器高4.7cm、113は口径14.9cm、器高5.3



c mで体部は内湾しつつ上外方に伸び、端部は丸く終わる。貼り付け高台は、断面台形でハの字型に下外方に開く。114は復原口径16.2 c m、器高6.5 c mを測り、体部は内湾しつつ上方に伸び端部は丸く終わる深い椀部をもつ。高台は断面不整形で直径10.3 c mを測る。4点共摩滅が激しく調整ははっきりしないが、内面は密なヘラミガキ、外面はヘラ状工具による丁寧なナデまたは指おさえにより仕上げられている。

須恵器は、杯・高杯・甕片・鉢などが出土した。大半が溝01が掘り込まれる以前の古墳時代の遺構からの混入品である。図化したのは3点、115は平安時代の須恵器鉢、口径18.2 c m、器高8.1 c m、底径7.9 c mを測る。口縁部は下方に尖り気味に肥厚し、先端は丸く終わる。底部は糸切痕が残る。116はI型式4段階の杯蓋、復原口径12 c m、器高4.7 c mを測る。天井部は丸く、口縁部と天井部を分ける稜は鋭く、口縁端部は内傾する面をもつ。117はI型式3段階の有蓋高杯、口径11.3 c m、器高9.8 c m、底径5.2 c mを測る。杯部立ち上がりはやや内傾しつつ上方に伸び、端部は水平な面を持つ。脚部は円孔スカシ孔が4方から穿たれている。

118は土師質の土馬、最大長9.6 c m、最大幅5 c m、残存高7.7 c mを測る。頭部、脚部、尻尾は欠損している。

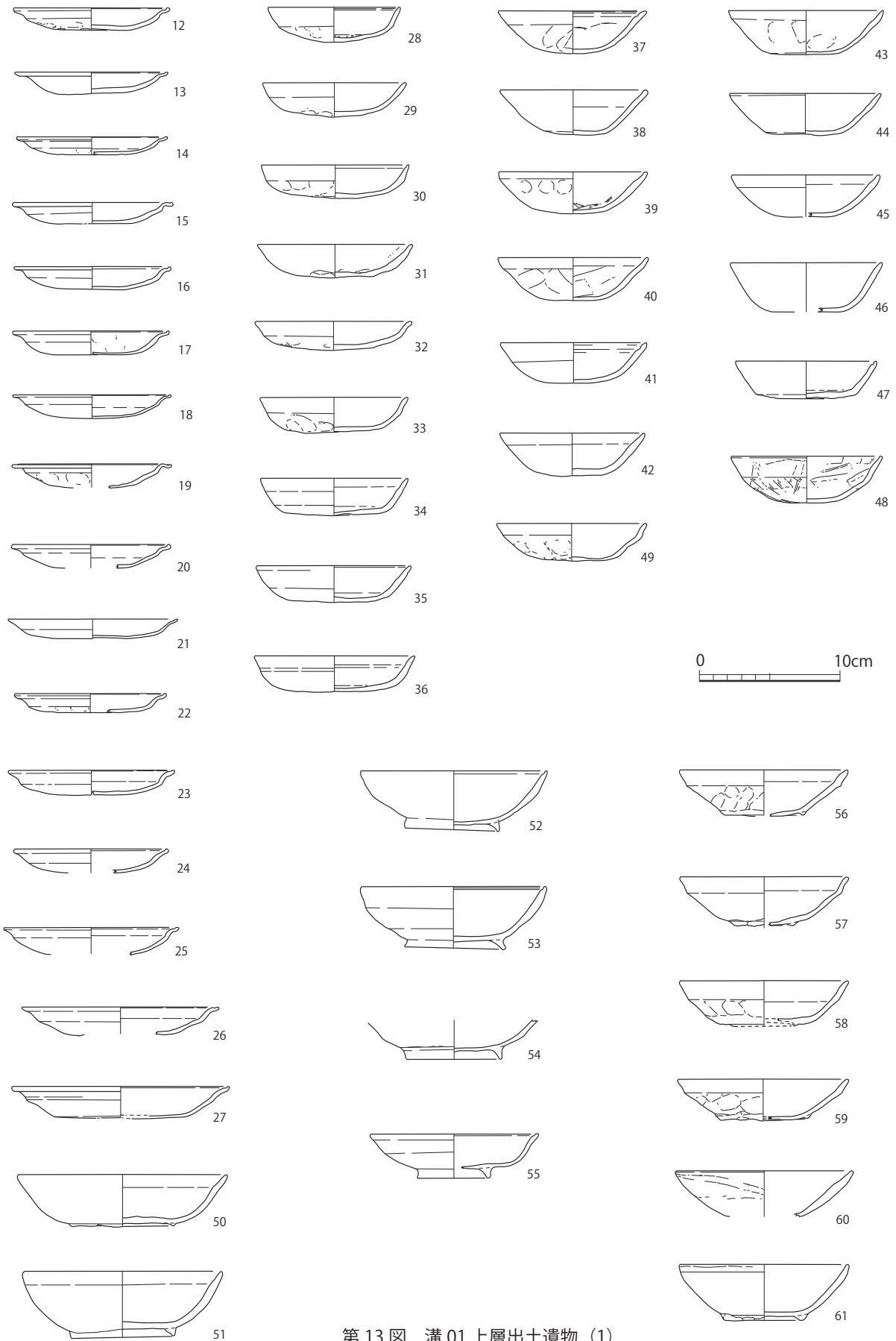
溝20（第8図・図版5） 溝01の西側、3・c～d区で検出した南北方向の溝である。溝01に沿って検出されたが、規模は小さく幅が約0.3～0.4 mで長さは部分的に途切れているところはあるが延長29 m分を確認した。北側は調査区外に伸びる。層厚は約0.1 mで埋土は1層（褐灰色弱粘質シルト）である。

溝21（第8図・図版5） 3・e区で検出した溝である。西側は調査区外である。北から南に3.2 mの位置で南東方向に向きを変え約2.3 mの位置で攪乱を受ける。平安時代の溝20に切られ、攪乱を受けているが、おそらく溝01にも切られていると考えられ、出土遺物の時期から考えると古墳時代の溝である可能性は否定できない。

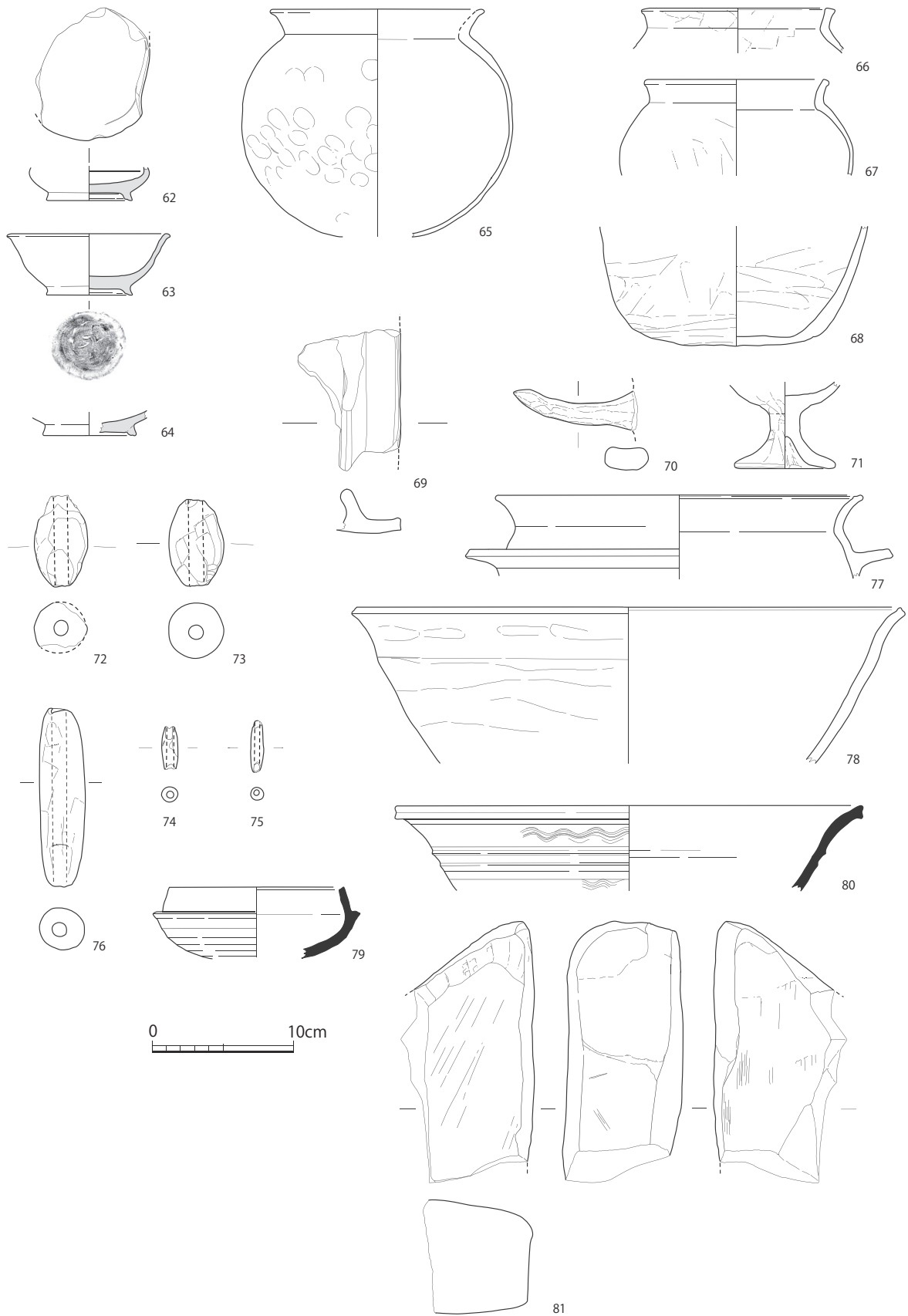
#### 出土遺物（第19図・図版20）

溝21からは古墳時代の須恵器、土師器、製塩土器が出土した。図化したのは4点である。第19図134は須恵器壺頸部で、復原頸径9.5 c m、残存高5.1 c mを測る。口縁端部は欠損している。135はI型式3段階の須恵器高杯脚部で、復原脚部底径9.2 c m、残存高9.5 c mを測る。台形スカシが4方から穿たれている。136は須恵器甕か壺の体部片、最大長10.5 c m、最大幅5.5 c mの小片であるが、外面に直線文タタキ目が施されているため図化掲載した。溝21西側側溝からも同じく直線文タタキ目が施された小片（137）が出土しているので関連する遺物として図化掲載した。直線文タタキ目は単線横走集線文タタキ目とも呼ばれ、通常の平行タタキ目にはほぼ直角に1本の直線をタタキ板に掘り込んだものであり、三国時代の朝鮮半島の軟質、および陶質土器に施されているものである。このタタキ目が施された土器は朝鮮半島の西半部百済地域を中心に出土している。すなわち百済地域との関係を示す土器といえる。後述する土坑26出土資料にも同様の資料がある。

第3章 調査成果



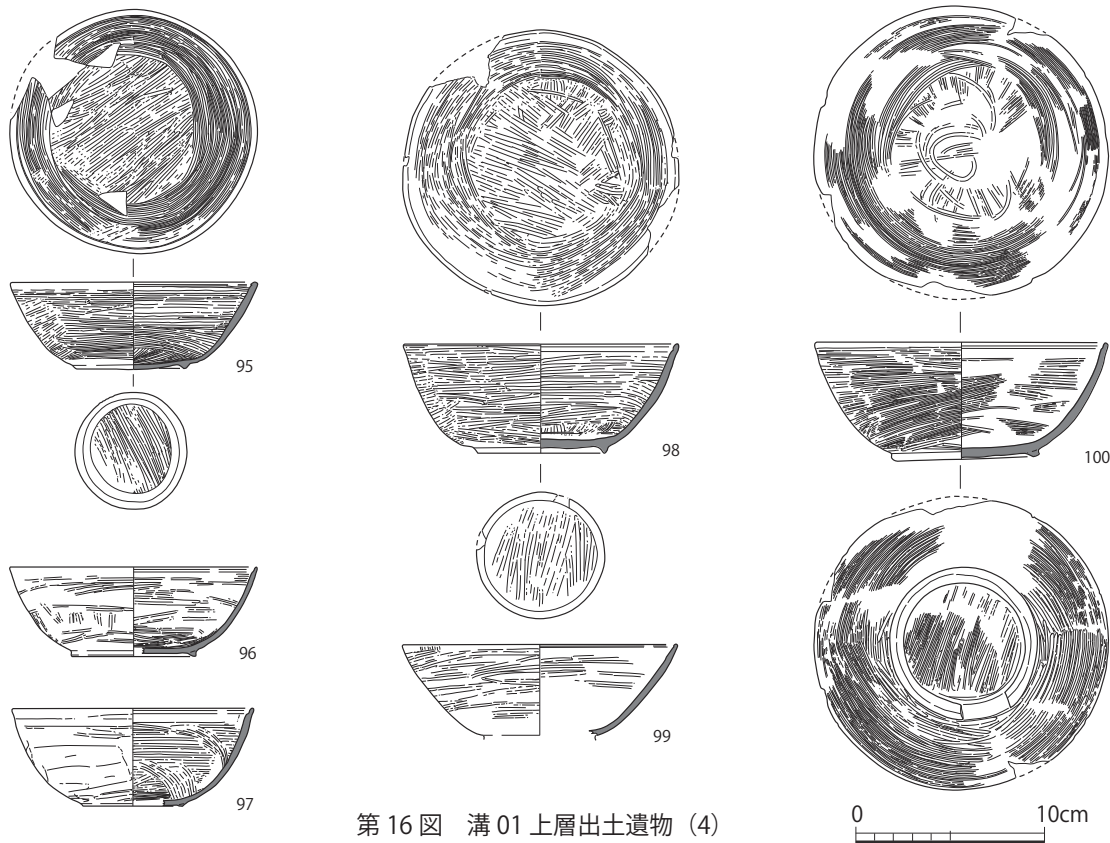
第13図 溝01上層出土遺物(1)



第14図 溝01上層出土遺物(2)



第15図 溝01上層出土遺物(3)



第16図 溝01上層出土遺物(4)

溝22(第8図) 3・e区で検出した溝で、西側は調査区外である。検出長は約2mで、南北ともに遺構の伸びは確認できなかったが、溝21と一体になるものと考えられる。

出土遺物(第19図)

溝22からは土師器、須恵器が出土した。図化したのは第19図138の須恵器杯身1点である。復原口径10.2cm、残存高3cmを測り、やや内傾しつつ上方に伸びるたちあがりを持ち、端部は丸く終わる。

ピット32・33(第8図) 2・c区で検出した。ピット33は約0.4mを測り不正円形を呈するピット32に切られている。

出土遺物(第19図)

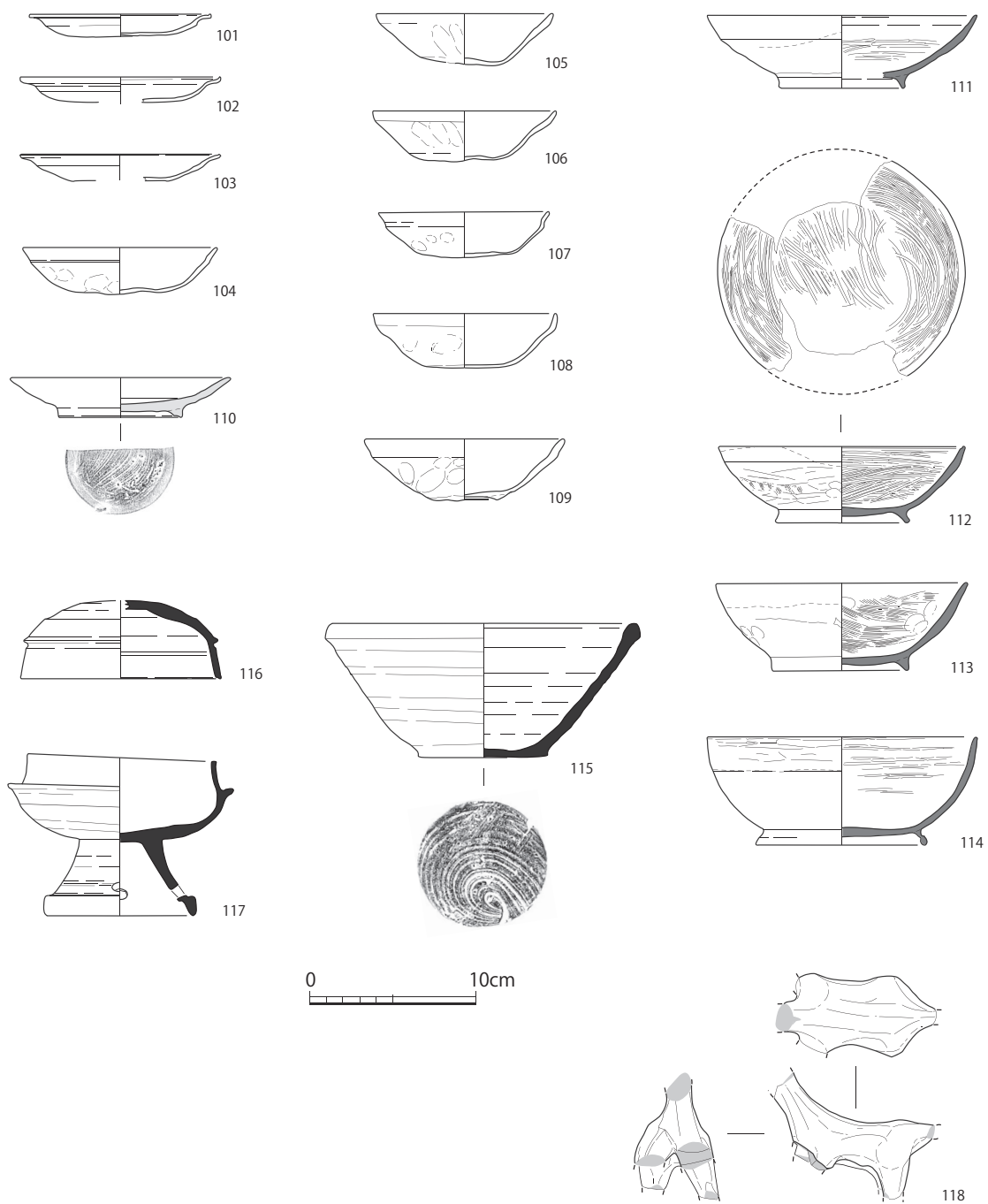
ピット32からは古墳時代の土師器が出土した。図化したのは第19図132の鉢1点で、復原口径13cm、器高7.9cmを測る。5世紀中頃のものと思われる。

ピット33からは第19図133の須恵器杯身が出土した。復原口径12cm、残存高5.4cmを測り、口縁端部は内傾する面を持つ。

ピット59(第8図) 3・e区で検出したピットで、溝01の検出面と同一面で検出した。南北長が0.5m、東西長は0.3mを測る。

出土遺物(第19図)

ピット59からは、黒色土器A類碗、土師器皿などが出土した。図化したのは第19図139の黒色土



第17図 溝01下層出土遺物



器A類の椀1点で、底部は欠損している。復原口径 13 c m、残存高 4.4 c mを測る。

【古墳時代】

土坑 08（第 18 図・図版 7） 2、f 区で検出した南北に長い長円形の土坑である。東側は平安時代の遺構溝 01 に削平され、南西側は攪乱でやられていた。規模は南北が約 3 m、南北の検出長は約 1.3 m、深さは約 0.6 m である。埋土は二層に細分され、1・2 層は平安時代の溝 01 の埋土である。3・4 層は明赤褐色粘質シルトをブロックで含む褐灰色粘質シルトで古墳時代の遺物が出土した。

出土遺物（第 19 図）

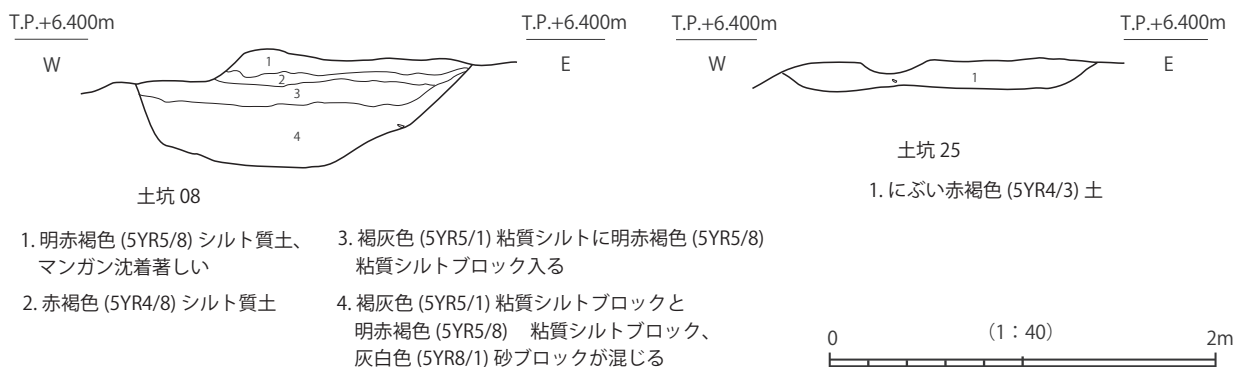
土坑 08 からは、平安時代の土師器食膳具の皿・杯、黒色土器 A・B 類、古墳時代の須恵器、土師器が出土した。このうち平安時代の遺物は上部の遺構溝 01 からの混入品と思われる。図化したのは 2 点、第 19 図 119 は土師器無稜外反高杯の口縁部、復原口径 17 c m、残存高 5.6 c m を測る。口縁部は短く外反し、端部は丸く終わる。120 は土師器複合口縁壺の口縁部、復原口径 26 c m、残存高 5 c m を測る。大きく外反し、端部は丸く終わる。

土坑 14（第 20 図・図版 6） 2e 区で検出した南北に長い長円形の土坑である。規模は南北が約 3.5 m、東西の検出長は約 2.5 m である。西半分の多くが平安時代の溝 01 によって削平される。土坑の底は中央部分が盛り上がり、風倒木によると考えられる。埋土は暗灰黄色弱粘質土と暗褐色弱粘質土の二層に分層できる。東肩中央やや南と西側に直径約 0.2m の円形のピットが確認されたが、上層から切りこんだ遺構だと考えられる。深さは約 0.05 m である。

出土遺物（第 21 図・図版 19）

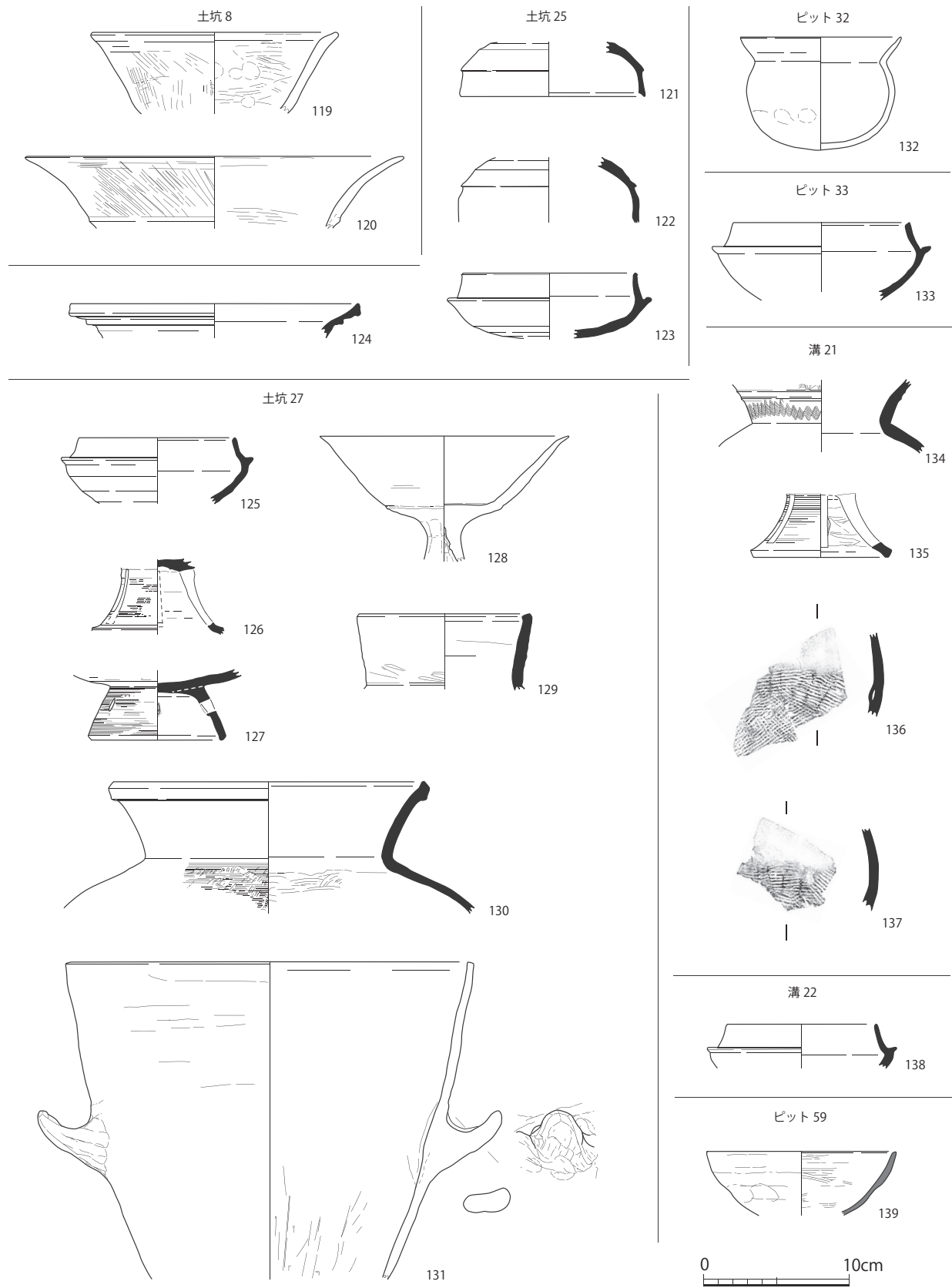
土坑 14 からは古墳時代の土師器、須恵器が出土した。図化したのは 8 点である。

第 21 図 140 は I 型式 3 段階の須恵器杯蓋で、復原口径 13.2 c m、残存高 4.2 c m、天井中央付近を欠損している。天井部と口縁部の境にある稜は断面三角形で鋭く、口縁端部は内傾沈線をもつ。141 は I 型式 2 段階の須恵器杯身、口径 10.7 c m、器高 5.3 c m を測る。底体部は丸みを帯びる形状で深さがある。たちあがりは内湾しつつも上方に伸び、端部は丸く終わる。胎土はやや粗く、直径 2～5 m m の白色粒が多く含まれている。142 は須恵器壺か甕の口頸部、口径 16.6 c m、残存高 5.4 c m を測る。



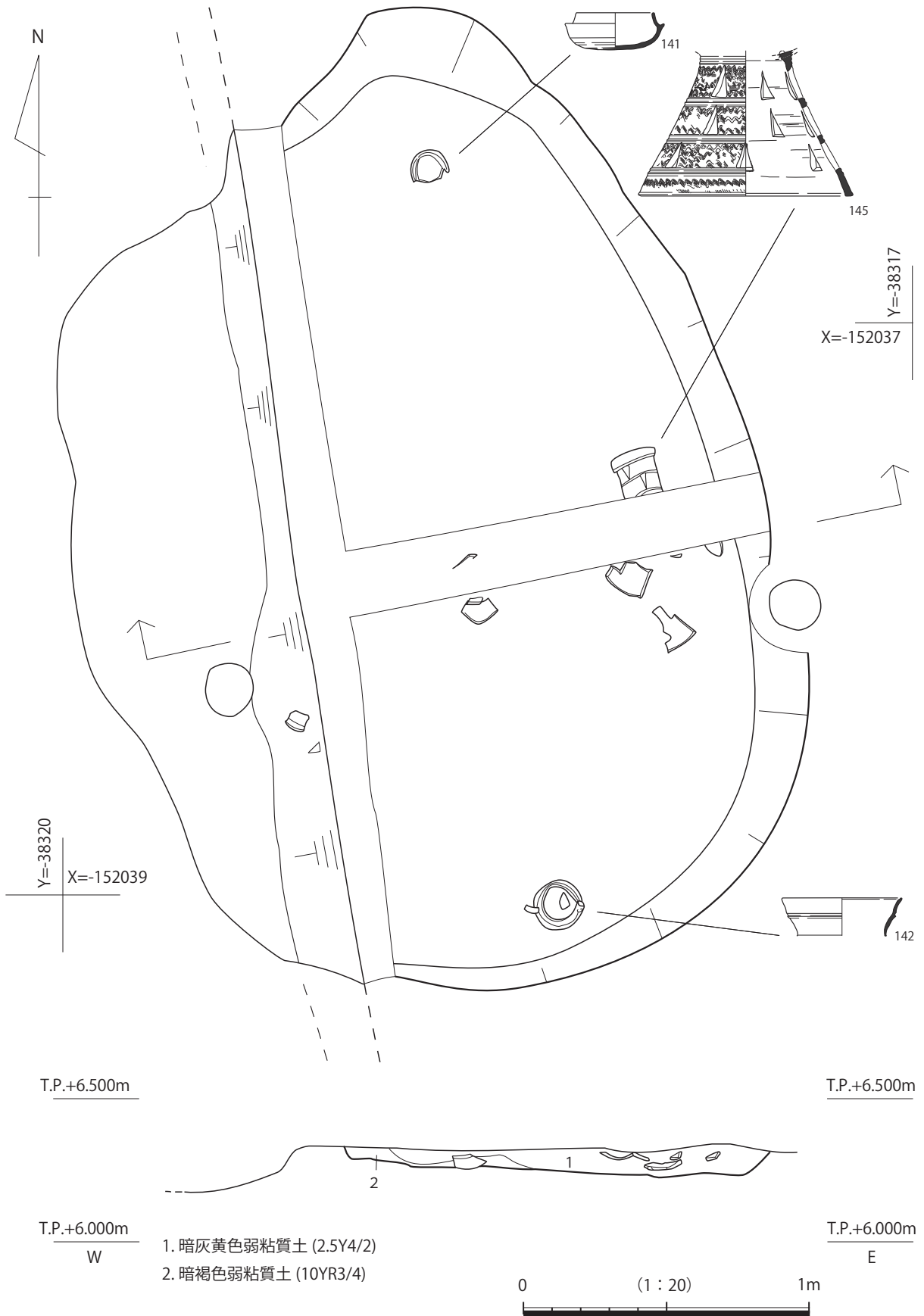
第 18 図 土坑 8・25 土層断面図

第3章 調査成果



第19図 土坑8・25・27、ピット32・33・59、溝21・22出土遺物  
 119・120(土坑8)、121～124(土坑25)、125～131(土坑27)、132(ピット32)、  
 133(ピット33)、134～137(溝21)、138(溝22)、139(ピット59)





第20図 土坑14平面図・土層断面図

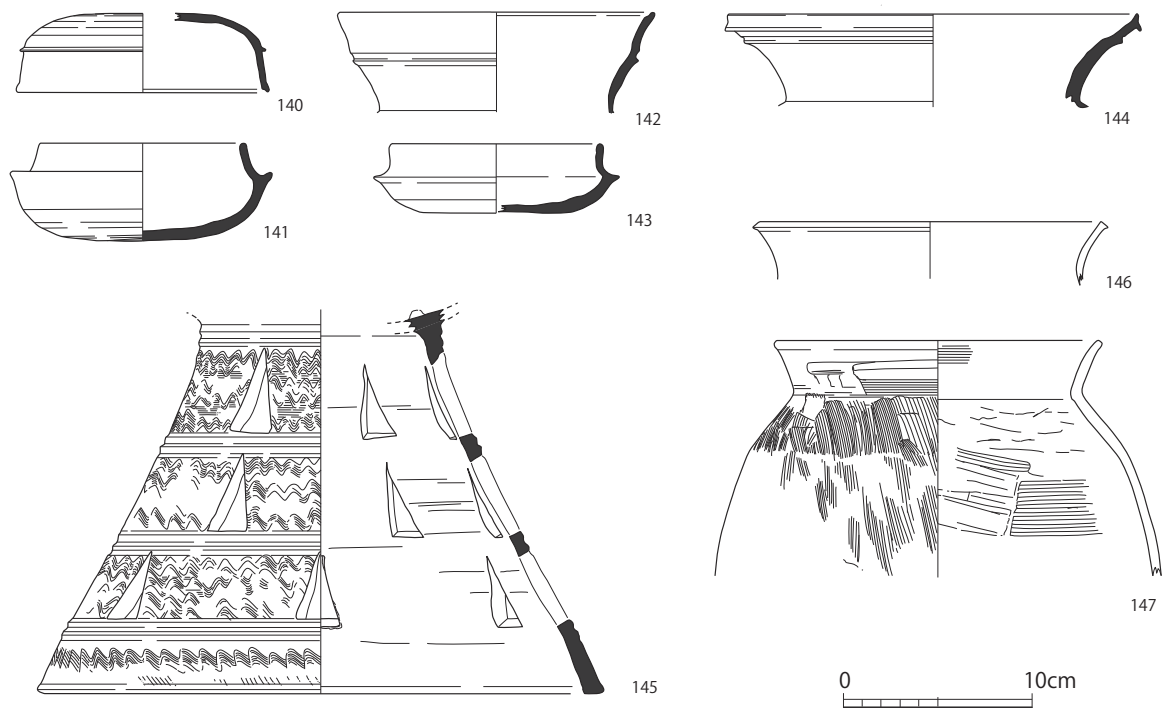
外面口頸部中程に沈線をめぐらす。口縁端部は内傾沈線をもち、端部は丸く終わる。土師器甕を模倣した形状を示す。143はI型式2段階の須恵器杯身、復原口径11cm、残存高3.7cmを測る。たちあがりは上方に伸び、端部は丸く終わる。焼成はやや軟質である。144はI型式3段階の須恵器甕口頸部、復原口径21.6cm、残存高4.9cmを測る。口縁端部は上下に肥厚し、端部はややくぼむ面を持つ。外面口縁直下に断面三角形の稜線をめぐらす。145はI型式3段階の高杯型器台脚部、脚部全体の3/5残存、底径30cm、残存高20.5cmを測る。外面は2本の沈線をめぐらして4段に区画されており、全ての区画に1条7本の波状文が施されている。上から3段の区画は波状文を施した後、三角形スリ孔が推定6方向から穿たれている。

146は土師器甕口頸部、復原口径15.2cm、残存高3.4cmを測る。口縁部は外反しつつ伸び、端部は面をもつ。色調は淡橙色を呈す。147は土師器甕、口縁部から体部中位まで残存、復原口径17.0cm、残存高12.5cmを測る。口縁部は上外方に伸び、端部はやや外反し丸く終わる。体部外面タテハケ、内面はハケ状工具によるヨコナデで仕上げられている。

土坑25(第18図) 2d、e区で検出した隅丸方形の土坑である。規模は東西・南北ともが約1.7m、深さは約0.15mである。埋土は一層で赤褐色土である。

出土遺物(第19図)

土坑25からは古墳時代の須恵器、土師器が出土した。図化したのは4点である。第19図121はI型式5段階の須恵器杯蓋で、復原口径12cm、残存高3.8cmを測る。天井部は丸く、口縁端部は内傾する面を持つ。122もI型式5段階の須恵器杯蓋、残存高は4.5cm、口縁端部は欠損しており、天井部は丸い。123はI型式4段階の須恵器杯身、復原口径12cm、残存高4.5cmを測る。124は須



第21図 土坑14出土遺物

恵器壺か甕の口縁部片で、復原口径 20 cm、残存高 2.4 cm を測る。口縁端部は下方に肥厚し端部は面を持つ。端部下に断面三角形の稜線をめぐらす。

落込み 26 (土坑 26・27) (第 22 図・図版 8) 1～3d 区で検出した不整形の落込みである。調査段階では土坑と認識していたので、西側を土坑 26、東側を土坑 27 と番号を付した。よって現場作業での遺構断面・遺物の取り上げ時にはその番号を記載しているが、整理段階で落ち込みであると認識したため落込み 26 とした。遺物については、土坑 26、土坑 27 として取り上げたものに合わせて整理を行ったので調査時の遺構番号を付して記載する。本遺構は、西から東方に下がっており、中央部分で急激に深くなり、さらに浅いくぼみとして東の調査区外にのびるもので、自然の微低地と考えられる。堆積土は鉄分の沈着する 2 (赤褐色シルト土) をはさんで上下にわかれる。西半の各層には、時期差のある遺物が多数含まれており、集落の営まれた期間、オープンな状態になっており、ごみ捨て場としてあつかわれたと考えられる。なお遺構の東半からは、遺物はほとんど出土しておらず、居住域からははずれると考えられる。

#### 出土遺物 (第 19、23～25 図・図版 20、21)

土坑 26 からはコンテナ約 4 箱の古墳時代の土師器、須恵器、陶質土器、韓式系土器等が出土した。調査区の古墳時代の遺構の中では最も遺物出土量が多い。図化したのは須恵器・陶質土器が 39 点、土師器は 14 点である。須恵器から詳細を説明する。

第 23 図 148 は I 型式 2 段階の須恵器杯蓋、復原口径 14 cm、残存高 3.7 cm を測る。外面天井部は手持ちヘラケズリで仕上げられており、天井部と口縁部を分ける稜は断面三角形で鋭い。口縁端部は面を持つ。149 は I 型式 3 段階の須恵器杯身、復原口径 10 cm、残存高 3.8 cm を測る。たちあがり高は 2.2 cm あるが、体部高は 1.5 cm と浅い底体部になる。外面受部直下まで回転ヘラケズリが施されている。150・151 は I 型式 5 段階の須恵器杯身、150 は復原口径 11 cm、残存高 3.9 cm、151 は復原口径 10.7 cm、残存高 4.1 cm、2 点とも口縁端部に内傾沈線をもつ。152～154、156～159 は II 型式 1 段階の須恵器杯身である。152～154 は復原口径 12 cm 前後、156～159 は復原口径 13.8 cm 前後をはかり、各々口縁端部に内傾斜面あるいは浅い沈線をもつ。155 は II 型式 2 段階の須恵器杯身、口径 12.3 cm、器高 4.7 cm を測る。たちあがりは歪みが大きく、口縁端部は丸く終わる。160 は I 型式 3 段階の須恵器高杯蓋で、口径 14 cm、器高 5.4 cm を測り、直径 2.6 cm、高さ 1 cm で中央がややくぼんだ円形をつまみを有す。胎土はやや粗く、直径 2～5 mm の白色粒が目立つ。161 は I 型式 5 段階の須恵器有蓋高杯、復原口径 10.9 cm、器高 9.9 cm、脚部底径 5.3 cm を測る。杯部口縁端部は内傾斜面を持ち、脚端部は強い回転ナデにより下方に肥厚し、外端面はややふくらむ。カキ目調整の後、三方から台形スカシが穿たれている。163・164 も 161 と同じく高杯脚部で、脚端部は段を成し、三方から台形スカシが穿たれている。164 は端部の段上部に稜をめぐらす。162 は須恵器高杯、I 型式 5 段階か。復原口径 11 cm、残存高 6.6 cm、脚部底径 9.2 cm、基部径 6 cm を測る。杯部立ち上がりは内湾しつつ上方に伸び、端部はわずかに段をなす。脚部は外反しつつ下方に開き、脚端部は面を持つ。三方向から円形スカシが穿たれている。165・166 も 162 と同じ形態の高杯脚部で、165 は楕円形、166 は長方形スカシ孔が穿たれている。167 は II 型式 1 段階の須恵器長脚一段高杯脚

部で、脚部底径 8.2 c m、基部径 2.1 c m、残存高 7.1 c mを測る。脚部は下外方にラップ状に開き、端部は丸くふくらむ。直径約 8.5 c mの円形スカシが三方から穿たれている。

168 は I 形式 3 段階の筒形器台上部、装飾壺で最大腹径 9.7 c m、残存高 5.5 c mを測る。口頸部は欠損しているが、甕を模した形状で、体部上位は沈線に区画されたエリアに列点文を施しその後円孔が五方向から穿たれ、体部下位は波状文が密に施されている。

169 は II 型式 1 段階の須恵器甕、頸部径 5.9 c m、体部最大腹径 9.7 c m、残存高 11.2 c mを測り、口縁端部は欠損している。球形に近い体部の外面はカキ目が、底体部は回転ヘラケズリが施されている。

170 は I 型式 3 段階の須恵器甕、口頸部は欠損しており、やや扁平な球形の体部最大腹径は 6.3 c m、残存高 6.9 c mを測る。外面体部上位、浅い沈線に区画されたエリアに波状文が施され、底体部は丁寧なヘラケズリが施されている。

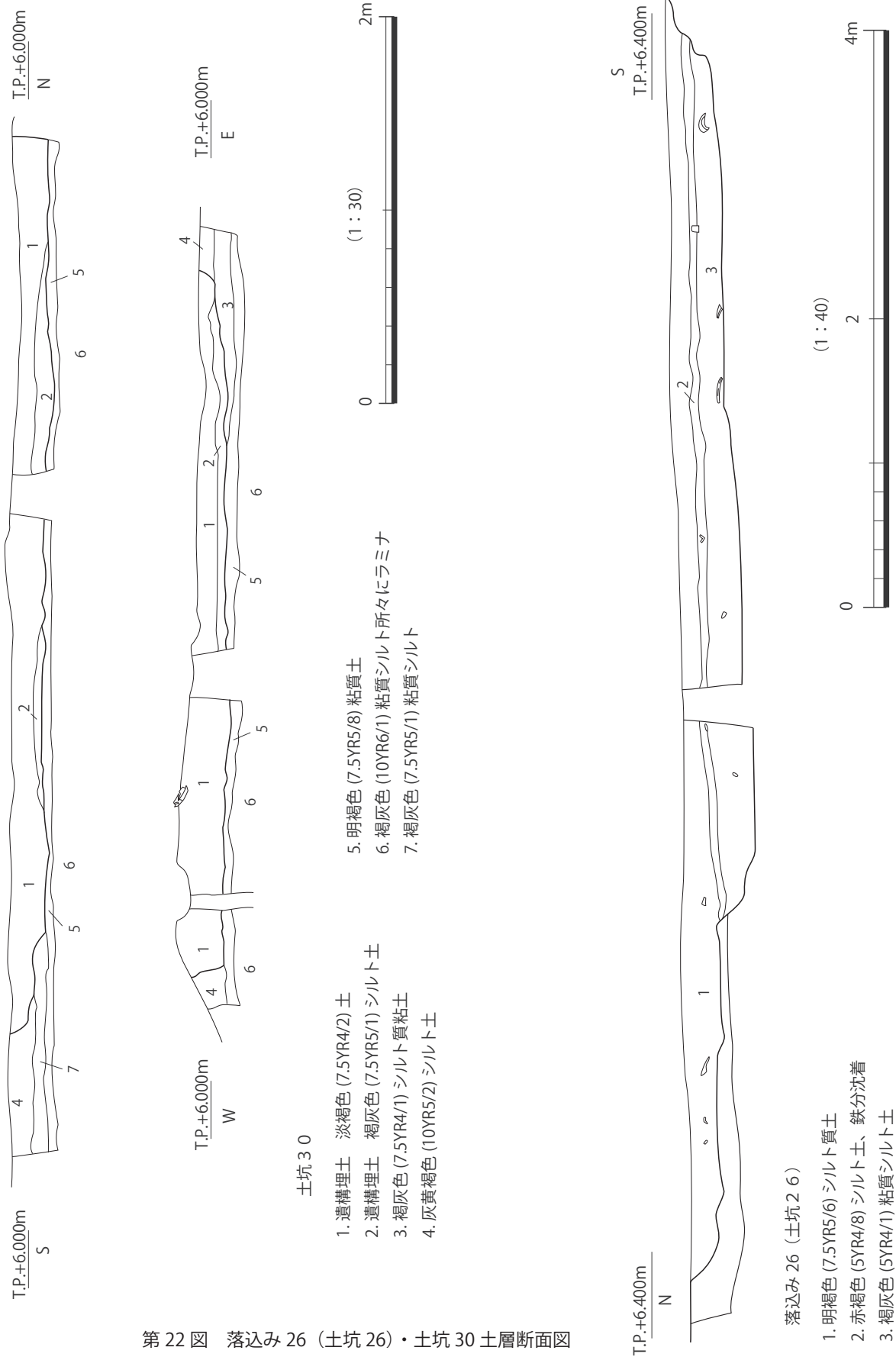
174 は陶質土器の口頸部、復原口径 15.9 c m、復原頸部径 12.7 c m、残存高 4 c mを測る。口縁部は短く外反して上外方に伸び、端部は深い沈線をめぐらす。わずかに残存している体部には細かい平行タタキが残る。胎土は緻密で焼成は良好堅緻、色調は内外面灰色、断面は紫灰色を呈す。

175 ~ 177 は、第 19 図 136・137（溝 21 出土遺物）と同じく直線文タタキ目をもつ小片である。

171 ~ 173 は壺か甕の口頸部、全て体部は欠損している。171 は復原口径 14.6 c m、残存高 4.5 c mを測り、頸部より外反する口縁部を持ち、端部は面を持つ。外面稜により分けられた上下 2 段両方のエリアに波状文が施されている。172 は復原口径 16.3 c m、残存高 6.7 c mを測り、頸部より外反する口縁部を持ち、口縁端部は上下にわずかに肥厚し段を成す。外面凸線により 2 段に区切られた上段のエリアに波状文が施されている。焼成は不良で色調は内外面にぶい黄橙色、断面は橙色を呈す。173 は復原口径 16.6 c m、残存高 5.6 c mをはかり、頸部より外反する口縁部を持ち、端部は上下に肥厚し段を成す。外面は自然釉が厚くかかっており、付着物がみられる。断面三角形の稜線により三段に区画された中段、下段のエリアに波状文がわずかに観察できた。

第 24 図 178 ~ 186 は全て須恵器の甕か壺、口縁部から体部中位まで残存しているものもある。

178 は復原口径 16.6 c m、残存高 5.6 c m、口縁部は頸部より外方に伸び、端部は外面に断面長方形の突帯をめぐらしたような形状をもつ。焼成は軟質、色調は灰白色を呈す。179 は復原口径 18.4 c m、残存高 8.3 c m、口頸部から体部上半肩部まで残存している。口縁部は頸部より外反し、端部は上下に肥厚し段を成す。体部外面は平行タタキの上から粗いカキ目が施され、内面は円弧上のあて具痕が残る。頸部にタテ方向に 1 本のヘラ記号が入れている。180・181 は 2 点共口頸部から体部上半肩部まで残存、口縁部は頸部より外反し、端部は上下に肥厚しわずかにふくらむ面を成す。体部外面は平行タタキの上にカキ目、内面は円弧状のあて具痕がナデ消されている。180 は復原口径 19.4 c m、残存高 7.2 c m、181 は復原口径 21.2 c m、残存高 8.0 c mを測る。182 は復原口径 23.6 c m、残存高 5.8 c m、口縁部は頸部より外反し、端部は上下に肥厚しわずかにふくらむ面を成す。端部直下に断面三角形の稜線をめぐらす。焼成はやや軟質。183 は復原口径 25.0 c m、残存高 5.7 c m、口縁部は頸部より大きく外反し、端部は上下に肥厚し面を成す。端部直下に断面三角形の鋭い稜線をめぐらす。焼成は硬質であるが、色調は全体に赤褐色を呈す。184 は大型甕の口縁部、復原口径 50 c m、残存高 9.8 c mを測る。口縁部は頸部より外反し、端部は上方にわずかに肥厚し中央がややくぼむ面を成す。端部直下に断面三



第22図 落込み26 (土坑26)・土坑30土層断面図



角形の鋭い稜線をめぐらす。

185は復原口径24.2 cm、残存高9.5 cm、口頸部から体部上半肩部まで残存している。口縁部は頸部より外反し、端部は上下に肥厚し段を成す。体部外面は平行タタキの上からカキ目、頸部から連続して施され、内面は円弧上のあて具痕が残る。186は口頸部から体部中位程度まで残存、口径24.6 cm、頸部径16 cm、残存高21 cmを測る。口縁部は頸部より外反し、端部は上下に肥厚し外端面は段を成す。口頸部は2条の沈線により区画された上下2段のエリアそれぞれに波状文が施されている。体部外面は平行タタキの上にカキ目が施され、内面はあて具痕が残る。

第25図 187～200は土師器、土師質の遺物である。

187は土師器甕口頸部、復原口径18 cm、残存高5.7 cm、頸部はくの字形に屈曲し口縁部は短く上外方に伸び端部は丸く終わる。体部外面は粗いタテハケ、内面は工具によるケズリ状ナデ、胎土は粗く、直径2 mm前後の白色粒を多く含む。188も土師器甕口頸部、復原口径20.4 cm、残存高6 cm、口縁部は外反しつつ上外方に伸び端部は面を持つ。体部外面は細かいタテハケ、内面はヨコハケが残る。

189～191は土師器高杯、189は基部周囲、190は脚部から杯底部、191は脚部のみ残存している。189は基部径2.8 cm、残存高8.2 cmを測り、脚部内面は横方向にケズリ状ナデ、基部内に刺突痕が残る。190は基部径2 cm、底径8 cm、残存高9.6 cmを測る。脚部はハケ状工具で調整されており、脚部内面の絞り痕は横方向にナデ消されている。基部周辺も細かいハケ状工具でタテ方向にナデられ脚部と杯部の接合痕は消されている。杯内面底部はヨコナデの上から放射状にミガキが施されている。191はこの3点の高杯の中では脚部内面の調整が最もあらく、絞り痕や粘土の継ぎ目痕がそのまま残されている。外面三方向から円孔スカシが穿たれている。

192・193は羽釜の鏝で、生駒西麓産の胎土である。192は復原鏝径27 cm、193は復原鏝径33.8 cmを測る。羽釜で図化できたのはこの2点のみだが、他にも生駒西麓産の胎土をもつ羽釜の鏝、体部片、口縁部小片が数点出土している。

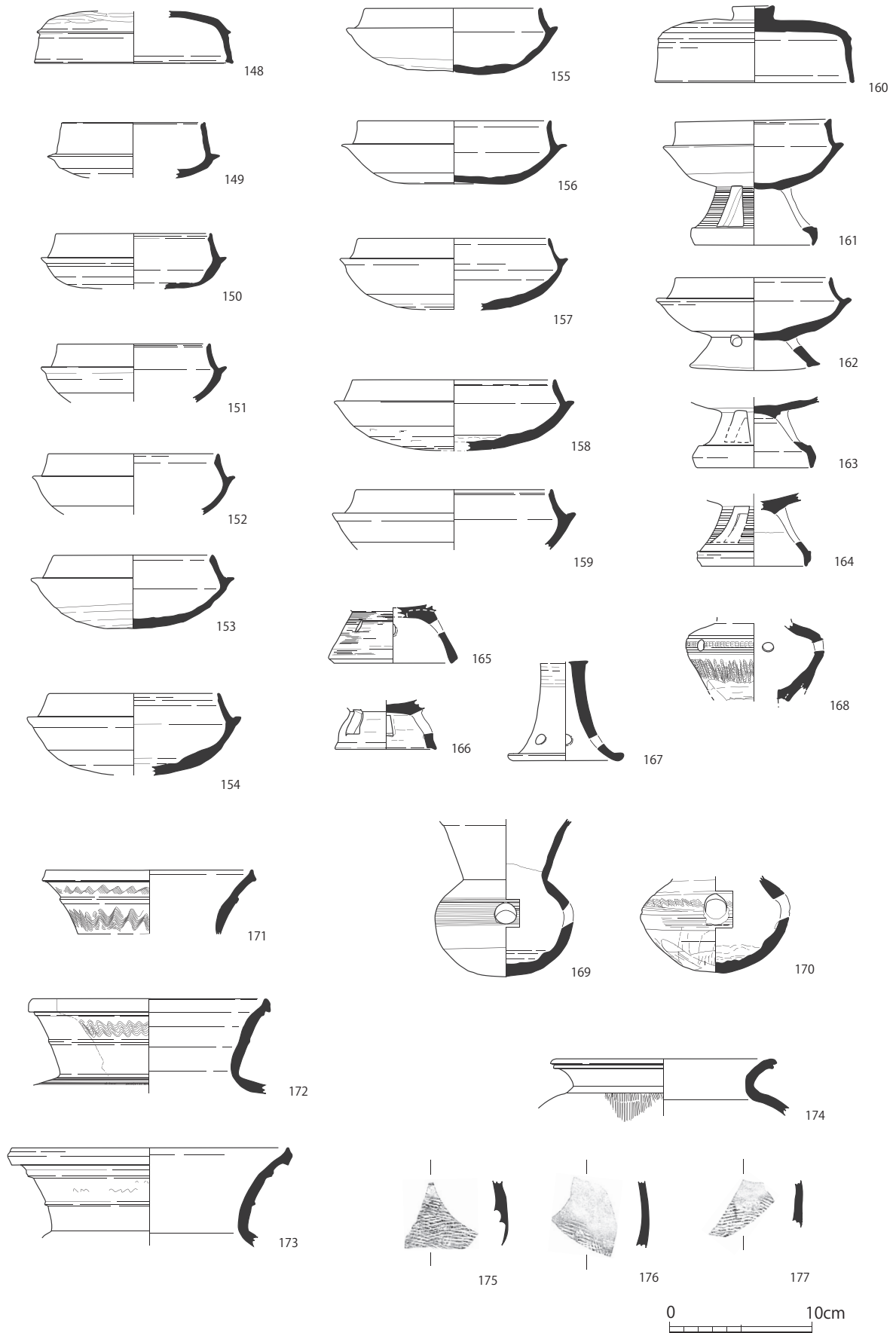
194は土師器鉢、復原口径14.0 cm、器高12.7 cm、復原底径6.5 cmを測る。把手は欠損している。

195～198は土師器の把手、195・198牛角状で根元は太く、先端は尖っている。198は生駒西麓産の胎土で、カマドの把手の可能性はある。196・197は甑の把手と思われ、196は4点の中で最も小さく不整形、197は断面扁平な楕円形で舌状である。

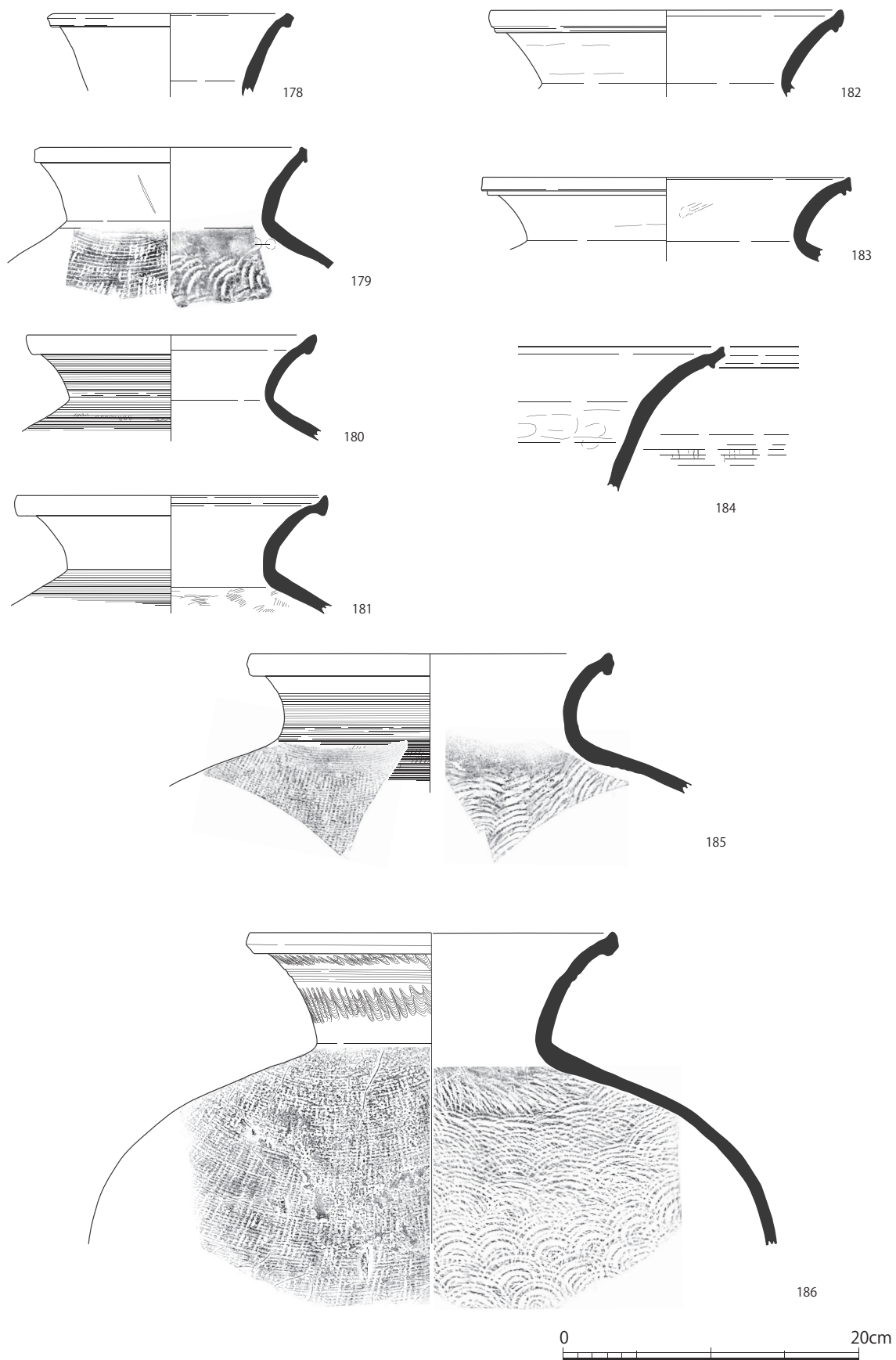
199は紡錘形の管状土錘、長さ5.3 cm、最大径2.2 cmを測る。200は移動式カマドの底部小片、復原底径40 cm前後を測る。胎土は粗く、直径1 mm前後の砂粒、金雲母を多く含む。

土坑27からは古墳時代の須恵器、土師器が出土した。図化したのは7点、第19図125～127、129・130は須恵器、128・131は土師器である。

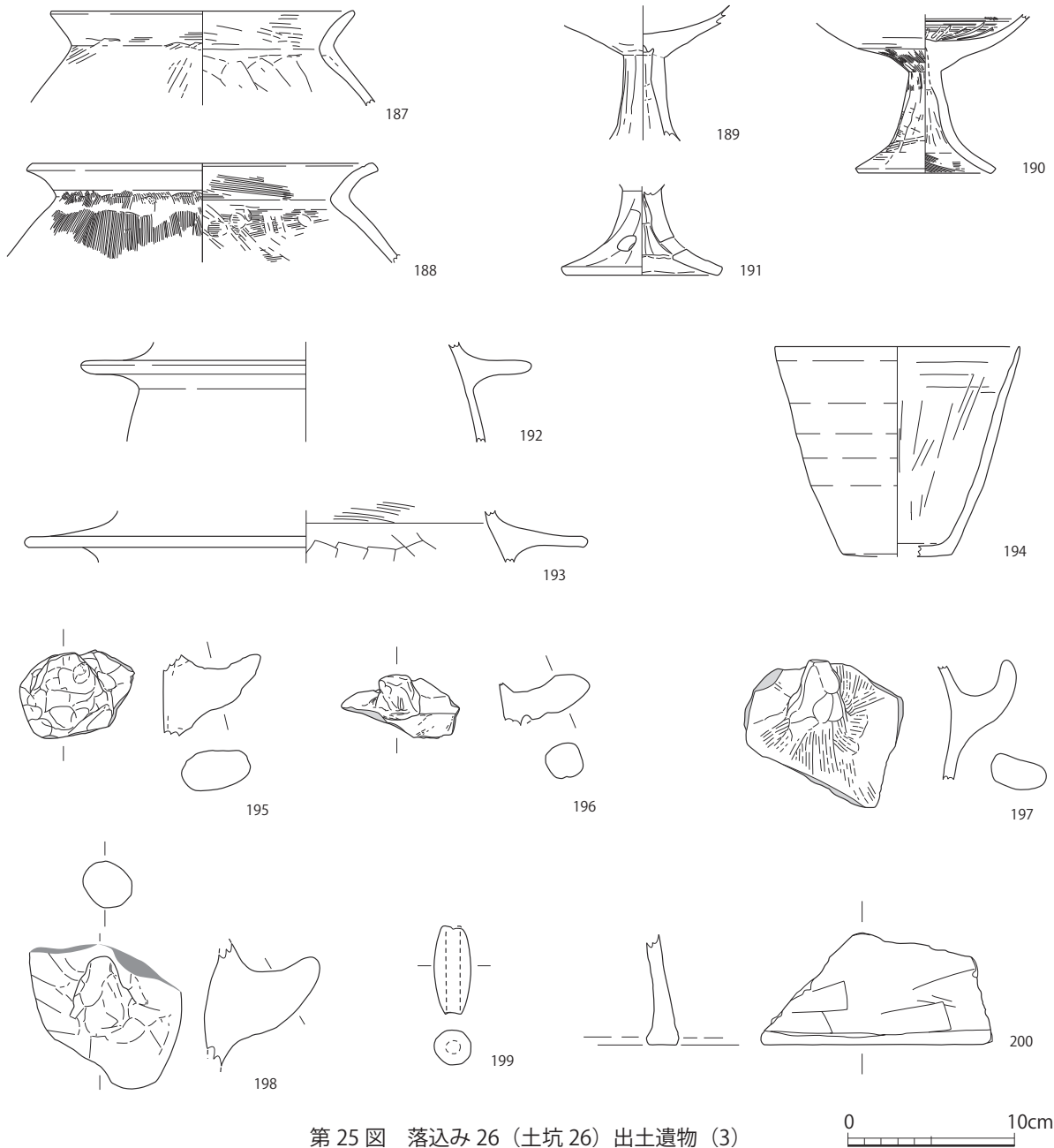
125はI型式4段階の須恵器杯身で、復原口径10.8 cm、残存高4.6 cmを測る。立ち上がりは内傾しつつ上方に伸び、端部は内傾する面をもつ。焼成は軟質である。126はI型式4段階の須恵器高杯脚部で脚端部は欠損している。残存高5.3 cm、台形のスカシ孔が三方向に穿たれている。127はII型式1段階の須恵器高杯脚部、残存高4.9 cm、底径6.4 cmを測る。三方向に長径1 cm前後、短径0.4 cmの小さい楕円形スカシ孔が穿たれている。129は須恵器甕口縁部、ほぼ上方に直立し、端部は面を持つ。復原口径11.7 cm、残存高5.3 cmを測る。130はI形式5段階の須恵器甕口頸部、復原



第23図 落込み26(土坑26)出土遺物(1)



第24図 落込み26（土坑26）出土遺物（2）



第25図 落込み26(土坑26)出土遺物(3)

口径 21.3 cm、残存高 9.1 cm を測る。口縁部は上外方に伸び、端部に段を持つ。体部外面は平行タタキの上からカキ目、内面の同心円状あて具痕はほぼすり消されている。

128 は土師器有稜外反高杯の杯部から基部、復原口径 17 cm、残存高 8.7 cm、基部径 3.4 cm を測る。杯部口縁は上外方にまっすぐ伸び、端部は外方に短く折り返している。脚部はほとんど欠損しており、基部内面に絞り痕が残る。131 は土師器甑、復原口径 28 cm、残存高 22 cm を測る。体部中位付近に舌状の把手がつく。土師器は図化した2点の他に、羽釜の鍔、甑の把手・底部などの煮沸具の破片が出土している。

土坑 30 (第 22 図・図版 8) 2、3 c 区で検出した南北に長い方形の土坑である。北側は調査区外に

伸びる。規模は東西が約 3.7 m、南北の検出長は約 4.6 m、深さは約 0.2 m である。埋土は上層に淡褐色土、その下層に部分的ではあるが明褐色粘質土（約 0.05 m）が部分的に堆積する。

出土遺物（第 26 図・図版 19）

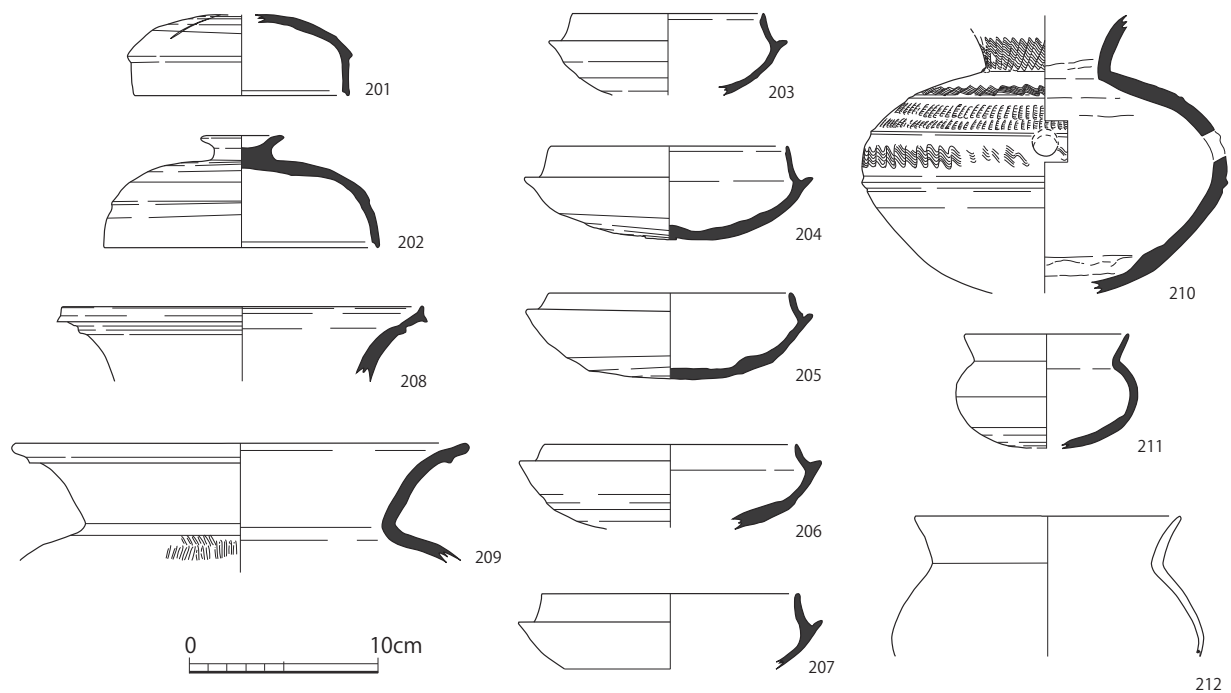
土坑 30 からはコンテナ約 2 箱分の古墳時代の遺物が出土した。図化したのは 12 点、須恵器が 11 点、土師器は 1 点のみである。

第 26 図 201 は I 型式 5 段階の須恵器杯蓋で、復原口径 11.3 cm、残存高 4.3 cm を測る。口縁端部は内傾沈線をもち、天井部にヘラ記号が刻まれている。202 は II 型式の須恵器高杯蓋で、口径 14.5 cm、器高 6 cm を測り、直径 4.4 cm、高さ 1.8 cm、中央がくぼむ扁平なつまみを持つ。天井部と口縁部を区切る稜はわずかに突出するのみで、直下に浅い沈線をめぐらす。口縁端部は内傾斜面を持つ。

203 は I 型式 5 段階の須恵器杯身で、復原口径 10.1 cm、残存高 4.3 cm を測り、口縁端部に内傾斜面を持つ。204 は II 型式 1 段階の須恵器杯身、口径 12.5 cm、器高 5 cm を測り、口縁端部に浅い沈線をめぐらす。受部には蓋と重ね焼きして焼成したためか、別個体が付着している。胎土は粗く、直径 5 mm 未満の白色粒、黒色粒を多く含む。205 ～ 207 は II 型式 2 から 3 段階の須恵器杯身、復原口径 13 cm 前後、器高 4.5 cm 前後を測る。

208 は I 型式 3 段階の須恵器甕の口縁、口縁端部は上下に肥厚し面を持つ。外面口縁部直下に稜をめぐらす。209 は I 型式 2 段階の須恵器甕の口縁、復原口径 23.8 cm、残存高 6.4 cm を測る。口縁部は上外方に伸び端部は外反し丸く終わる。外面口縁部直下に断面三角形の稜線をめぐらす。わずかに残る体部は、外面平行タタキが残る。

210 は I 型式 2 段階の大型甕で、口縁部と底部は欠損している。残存高 14.8 cm、体部最大腹径 19.6 cm、頸部径 6.5 cm を測る。外面口頸部は 1 条 12 ～ 13 本の細かい波状文が施されており、体



第 26 図 土坑 30 出土遺物



部上半は3本の稜線により区画されたエリアの上段に波状文、中段には列点文が2段に、下段にはまた波状文が施されている。体部下半は、工具による丁寧なナデで仕上げられている。

211はI型式4段階の須恵器鉢、復原口径8.6cm、残存高6cmを測る。

212は土師器甕、復原口径14cm、残存高7.5cmを測る。器壁は薄く、口縁部は外反し端部はやや尖る。色調は橙色を呈す。

土坑57(第27図・図版7) 2、3f区で検出した南北に長い方形の土坑である。東側の肩は平安時代の溝01に切れ、南西部分は攪乱坑で破壊されている。規模は南北が約2.8m、東西の検出長は約1.7mである。中央部分、南北1.7m、東西1.2mの範囲が二段掘状に落ち込む。深さは約0.5mである。埋土は上層に1、2(明褐色粘質土、褐灰色シルト質粘土:約0.03m)、二段掘部分は、三層に細分され中央部分に堆積していた3(褐灰色シルト質土:約0.15m)には、大量の炭が包含され、古墳時代の土器が出土したのは主としてこの層である。

出土遺物(第28図・図版21)

土坑57からはコンテナ約2箱分の古墳時代の遺物が出土した。図化したのは12点、須恵器が5点、土師器は7点である。

第28図213はI型式2段階の須恵器杯蓋、口径13.9cm、器高5cmを測り、天井部と口縁部を区切る稜は短いが鋭い。214はI型式4段階の須恵器杯蓋、復原口径12.8cm、残存高4.4cmを測る。口縁端部はやや浅い内傾沈線を持つ。215はI型式2段階の須恵器杯身、復原口径10.6cm、残存高4.4cmを測る。たちあがりはやや内傾しつつ上方に伸び、端部は丸く終わる。

216はI型式2段階の大型甕、口縁端部は欠損している。残存高16.4cm、頸部径6.5cm、体部最大腹径17.5cmを測る。外面口頸部は1条10～11本の波状文、体部上部から中位まではカキ目調整の上から列点文が施されている。底部外面は丁寧なナデ、内面は刺突により器壁を薄くした痕が残る。

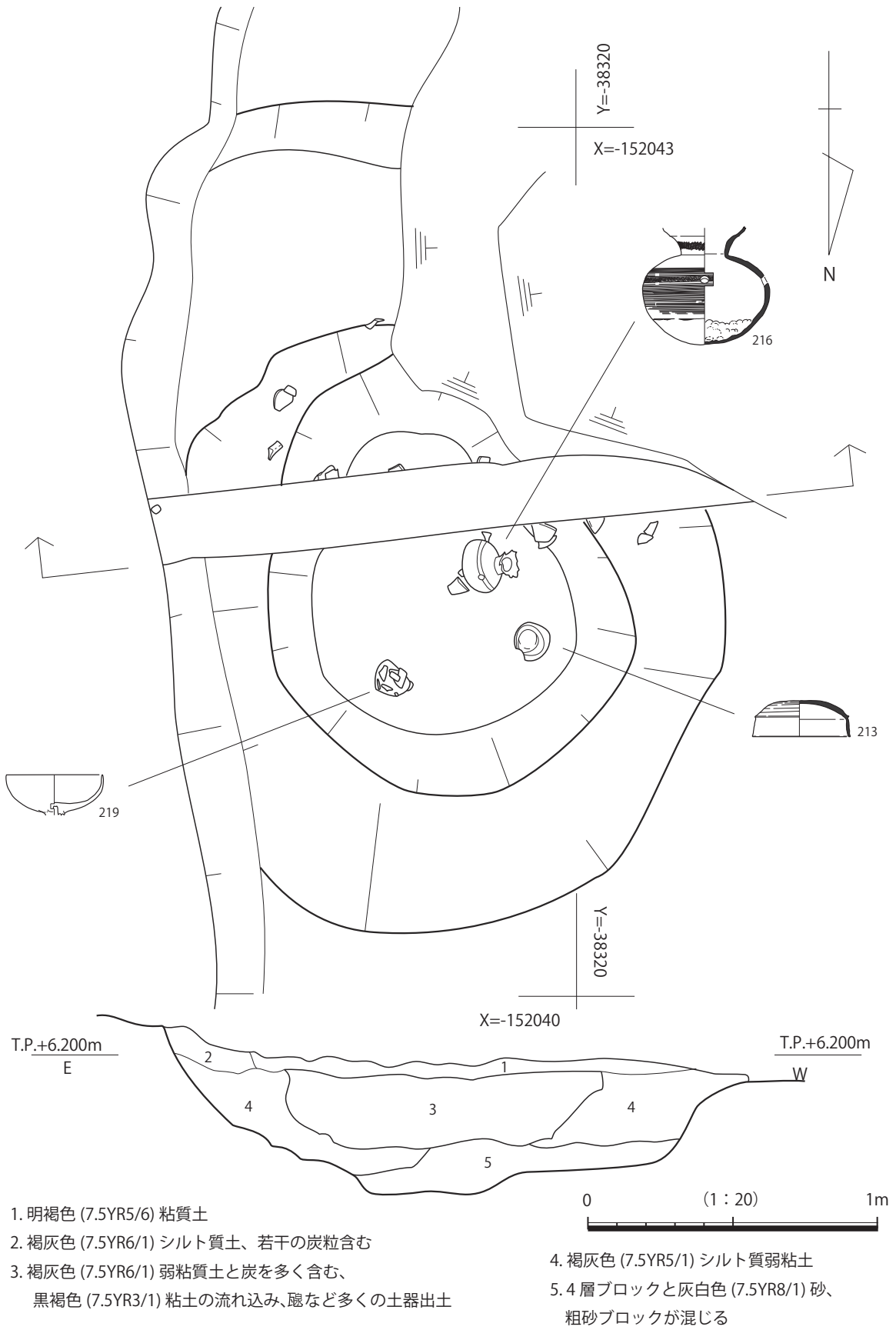
217・218は土師器甕口頸部、ともに頸部は断面くの字形に屈曲して口縁部は上外方に伸び端部は面をもつ。217は復原口径15.8cm、218は18.8cmを測る。

219～221は土師器高杯、219は椀形高杯の杯部、220は杯底部から基部、脚柱部まで、221は杯底部から脚端部まで残存している。219は13.2cm、残存高5.6cm、杯底部には脚部からの刺突痕が残る。胎土は密で色調は淡い橙色を呈す。220は基部径2.3cm、残存高7.1cm、脚部内に刺突痕が残る。221は脚部底径8.5cm、基部径2cm、残存高8cmを測る。脚柱部外面はへら状工具で丁寧なナデ、内面は杯底部内面に刺突痕、脚柱部内面は絞り痕が残る。胎土は密で色調はにぶい橙色を呈す。

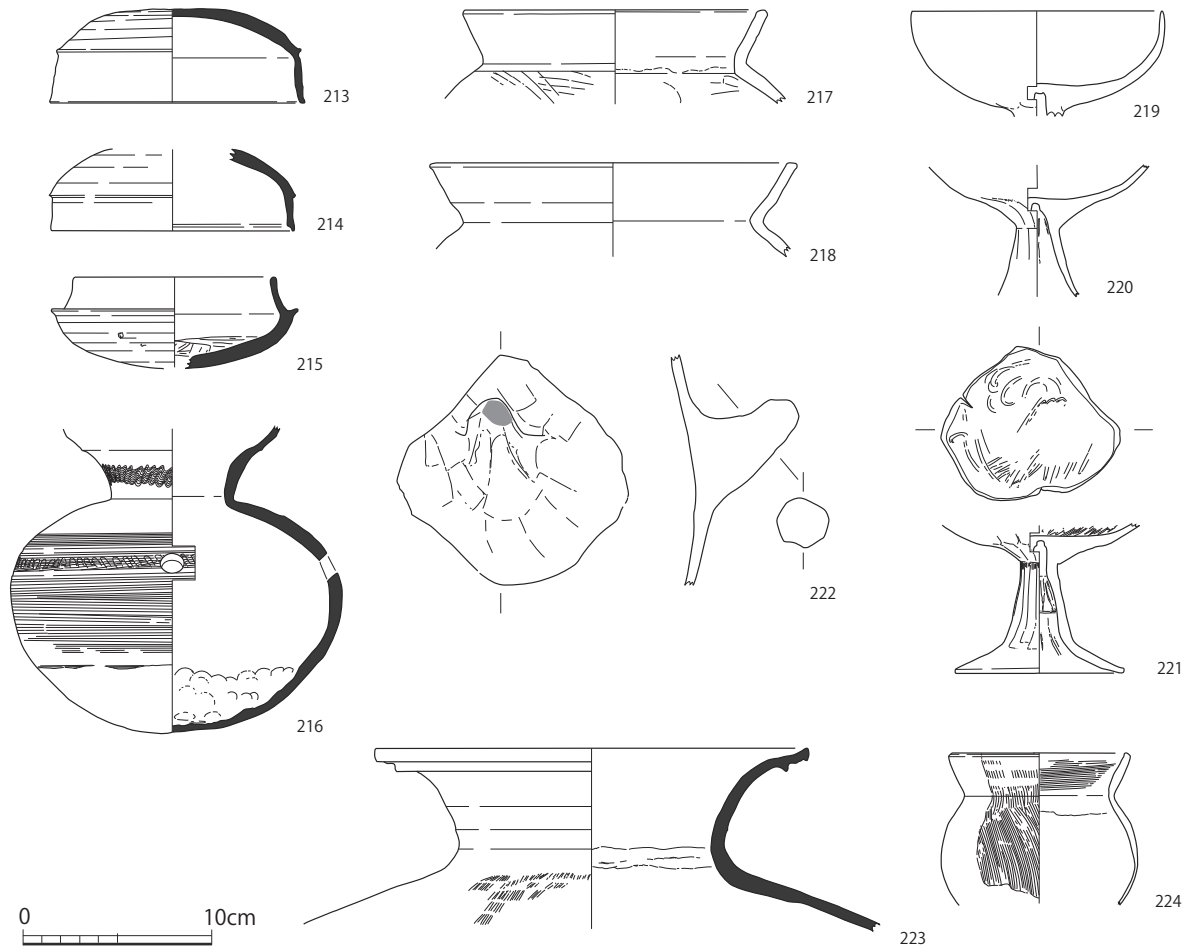
222は土師質把手、最大長7cm、断面はほぼ円形、牛角状で先端に黒斑があり丸く終わる。胎土は粗く、直径2～3mm白色粒、灰色粒を大変多く含む。

223はI型式3段階の須恵器甕口頸部で、復原口径22.8cm、残存高9.8cmを測る。口縁部は上部で強く外反し、端部は面を持つ。外面口縁直下に断面三角形の鋭い稜線をめぐらし、体部外面は平行タタキ、内面あて具痕はナデ消されている。

224は土師器小甕、復原口径9.2cm、残存高8.2cm、球形の体部に上外方に伸びる口縁部を持つ。外面は細かいハケで仕上げられており、口縁端部まで煤が付着している。



第27図 土坑57平面図・土層断面図



第28図 土坑57出土遺物

## (3) 第3面 (第29～31図・図版9～11、22)

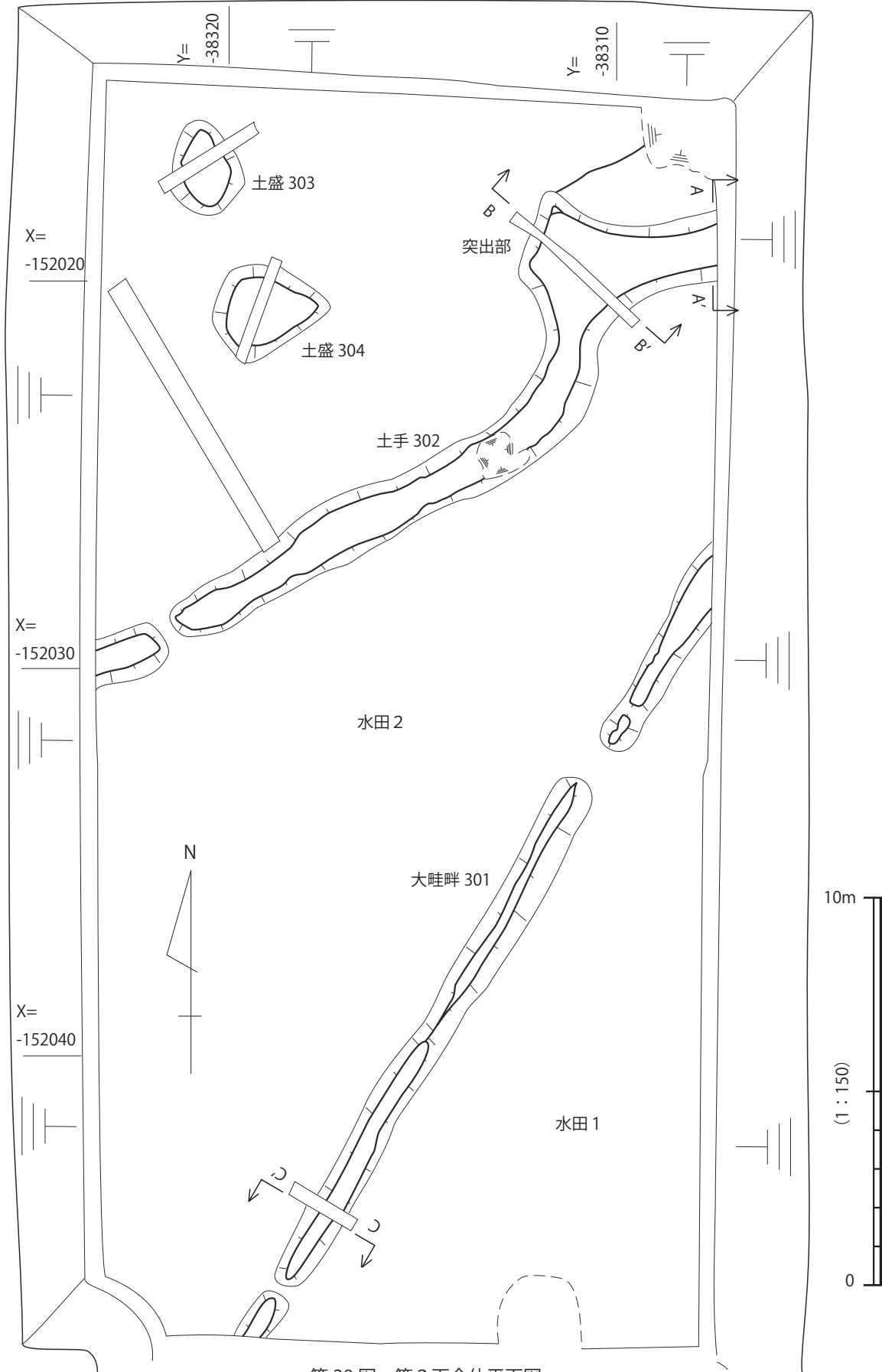
第20層(第5図南壁土層断面図)黒褐色粘土の上面で、大畦畔301と土手302を各1条、土手の北側に土盛303・304の2基を検出した。大畦畔の南と北の遺構面には、ヒトの足跡が多数確認でき、水田面と考えられる。いっぽう土手より北には、足跡は確認できず流路と考えられる。なお、土手302より北側の流路部分は、工事掘削が遺構検出面より下におよばないので、流路内埋土の掘削は行わず、土手と土盛の裾部分の確認、および断面確認のための断ちわりまでの調査を行った。

水田ベース土、第3面の遺構、第3面を覆う洪水砂からの出土遺物は、第31図のとおりである。

225～237・250は、第3面を覆う洪水砂出土の遺物。弥生時代中期～布留式中頃の多くの遺物を含む。なお布留甕225は、土手302裾で水田面に密着して出土し、水田の廃絶時期を示すと考えられる。

238～248・252は、第3面の各種遺構の盛土から出土した土器で、後に報告する。

249・251・253～255は、第3面のベースとなる第20層の黒色粘土層から出土した土器であり、時期は弥生時代後期である。甕の底部は安定感がある。なお図示しえないものの、全面で多数の土器細片が出土しているが、タタキ甕はすべてが弥生時代V様式系であり、庄内甕と認定できるものは皆無である。よって第20層は、弥生時代後期に形成されたことがわかる。



第 29 図 第 3 面全体平面図

大畦畔 301 南西―北東方向に直線的のびる畦畔であり、24 m分を確認した。南 1.5 mで途切れた部分は水口であり、ラミナのあるシルトで埋まっていた。北側の途切れは破損である。土手 302 の西端部分が洪水で破堤しており、そこからの流水によって破損したもので、その間の水田面も抉られた状況を呈していた。

畦畔の両側は、水田面（南東を水田 1、北西を水田 2 と記す）であり、ヒトの足跡が著しい。ヒト以外は未確認である。畦畔の規模は、幅 0.8～1.2 mで、水田 2 からは高さ 25 cm程度を盛土する。畦畔を挟んで、水田 1 が水田 2 より 10 cm程度高く、また各水田面は北東に向かって低くなる。畦畔盛土は、シルト質の強い黒褐色粘土である。盛土内には、木杭を打設したり、心材として木材を入れる補強は行っていない。なお盛土にはベース土と同じくタタキ甕の破片を含むが、これは周囲のベース土を盛り上げたことによる。なお各水田面を区画するであろう小畦畔は未確認である。

出土遺物 239 は 2-e・f 区、大畦畔 301 の盛土から出土した小型器台である。体部に円孔を貫通させる。体部と裾部との間にわずかの屈曲がある。通常の胎土、口縁外端部に凹線をめぐらせる。内外面とも縦方向に太筋のヘラミガキを施す。庄内式の範囲に位置付けられる。

225 は、3-d 区、土手 302 の裾で遺構面に密着する状況で出土した布留甕である。土器は水田面から土手の表面を薄く覆うラミナのある灰色シルトで密閉されて出土した。口縁部は器壁がやや厚く外傾し、端部内面は肥厚する。体部の器壁もやや厚い。外面は肩部と下半部に左斜上方へのハケ目を施す。肩部に横ハケ目は見られない。内面はヘラケズリ。布留 3 式程度に位置付けられる。

土手 302 南西―北東にのびる土手で、20 m分を確認した。東部で「く」の字に屈曲する。流水の方向は南西から北東である。土手の規模は幅 1.3～1.8 m、水田 2 から高さ 30～40 cmの盛土で形成する。南西部分での途切れは洪水による破堤である。なお破堤付近を中心に、流れ側の堤の破損が著しい。

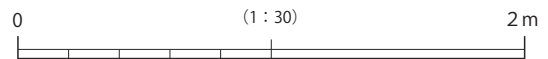
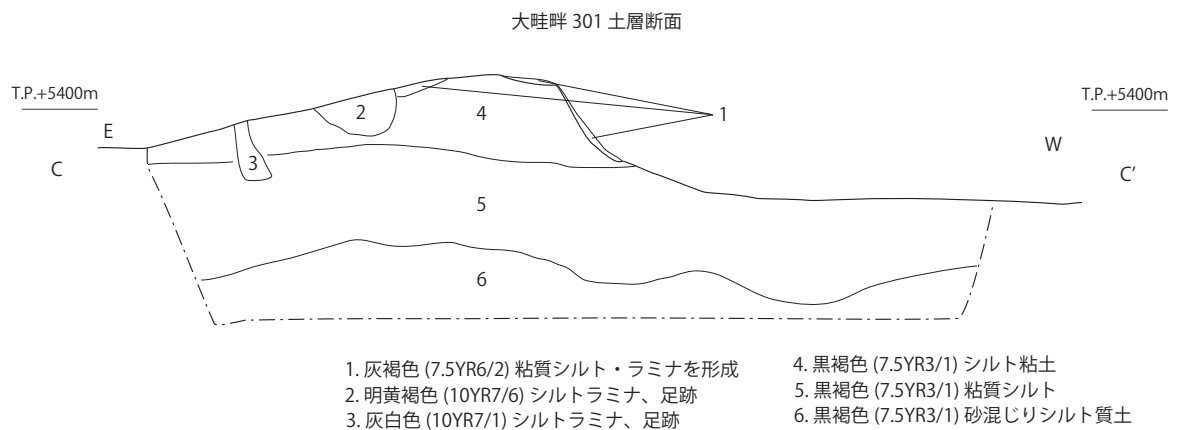
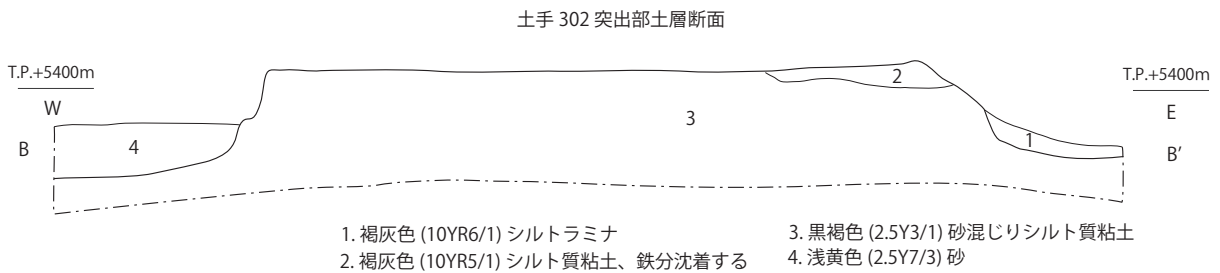
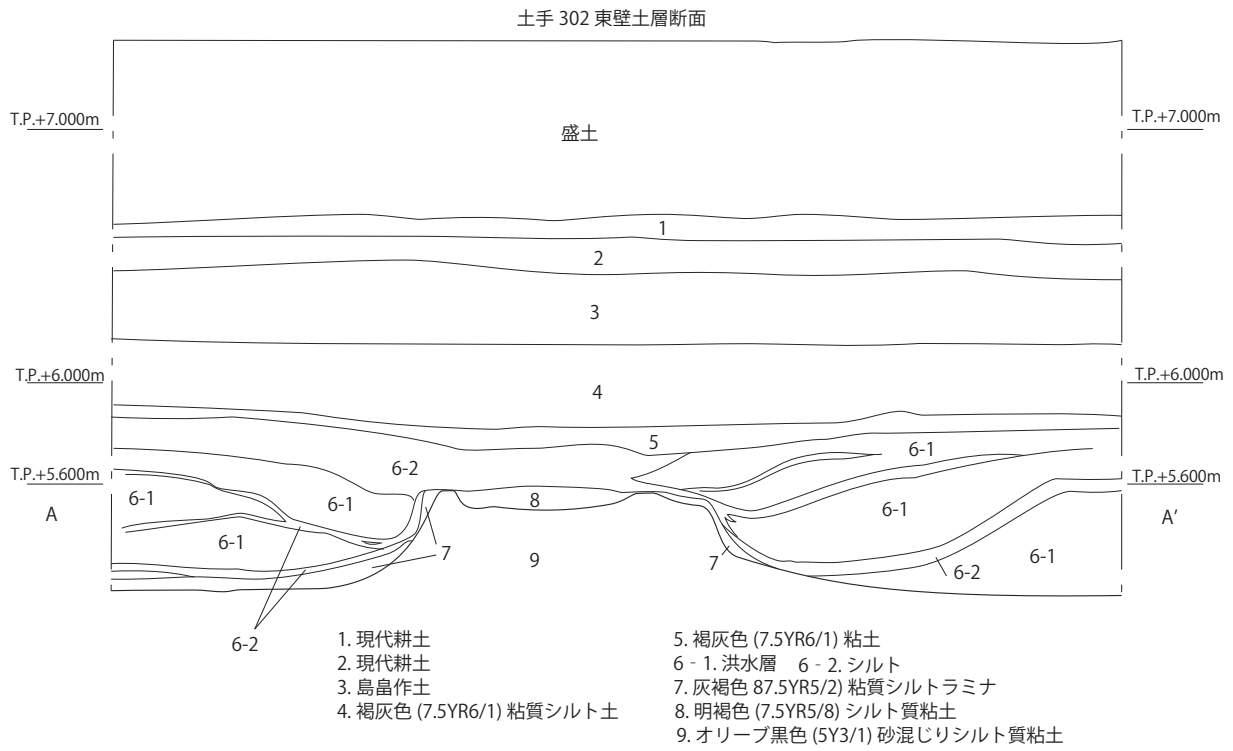
土手の北東の屈曲部で流路側に台形状に 2 m程度突出させる。台形突出部に設定したトレンチの断面観察からは、土手に突出部を取り付けた状況は確認できず、両者は一連の盛土によるものと考えられる。また土手、突出部ともに盛土のみにより、補強のために心材を入れたり、木杭を打設することはない。台形突出部から付け根上流側の側面が抉られ、そこに砂がくい込んでおり、強く流水が衝突し、それを北西に刎ねたことを示している。また突出部より下流側の土手に沿って、流水が緩慢になることで形成されたシルト質粘土の堆積が確認できたその範囲は、台形北角から北東にのびるラインで示した。これは洪水以前の常水時での堆積である。これらの状況から、突出部は「水制」として機能したと考えられる。

水制とは、川岸や堤防から流れの中心に向けて突出して設けた治水目的の河川構造物である。目的は流水を弱めて水制背後に土砂を堆積させて護岸とする、あるいは流水を刎ねて川岸や堤防に衝突しないよう中央に追いやり、川筋を安定させることにある。水制を形態的に分類すれば「出し類」「牛類」「粹類」の 3 種があり、本事例は「出し類」に相当する。「出し類」は、材料によって「杭出し」「石出し」「土出し」に分類できる。よって土手 302 に設置された台形突出部は、現状での類例は未確認ながら、わが国最古の「土出し水制」と考えられる。

出土遺物 238・240 は 1-c 区、土手 302 の盛土から出土した。238 は通常の胎土の甕である。口縁外端部に凹線をめぐらせる。口縁部は内外面ヨコナデ、体部は磨滅で不明。240 は通常胎土の底部



第3章 調査成果



第30図 第3面畦畔他土層断面図

である。体部内外面、底面ともナデ仕上げ。

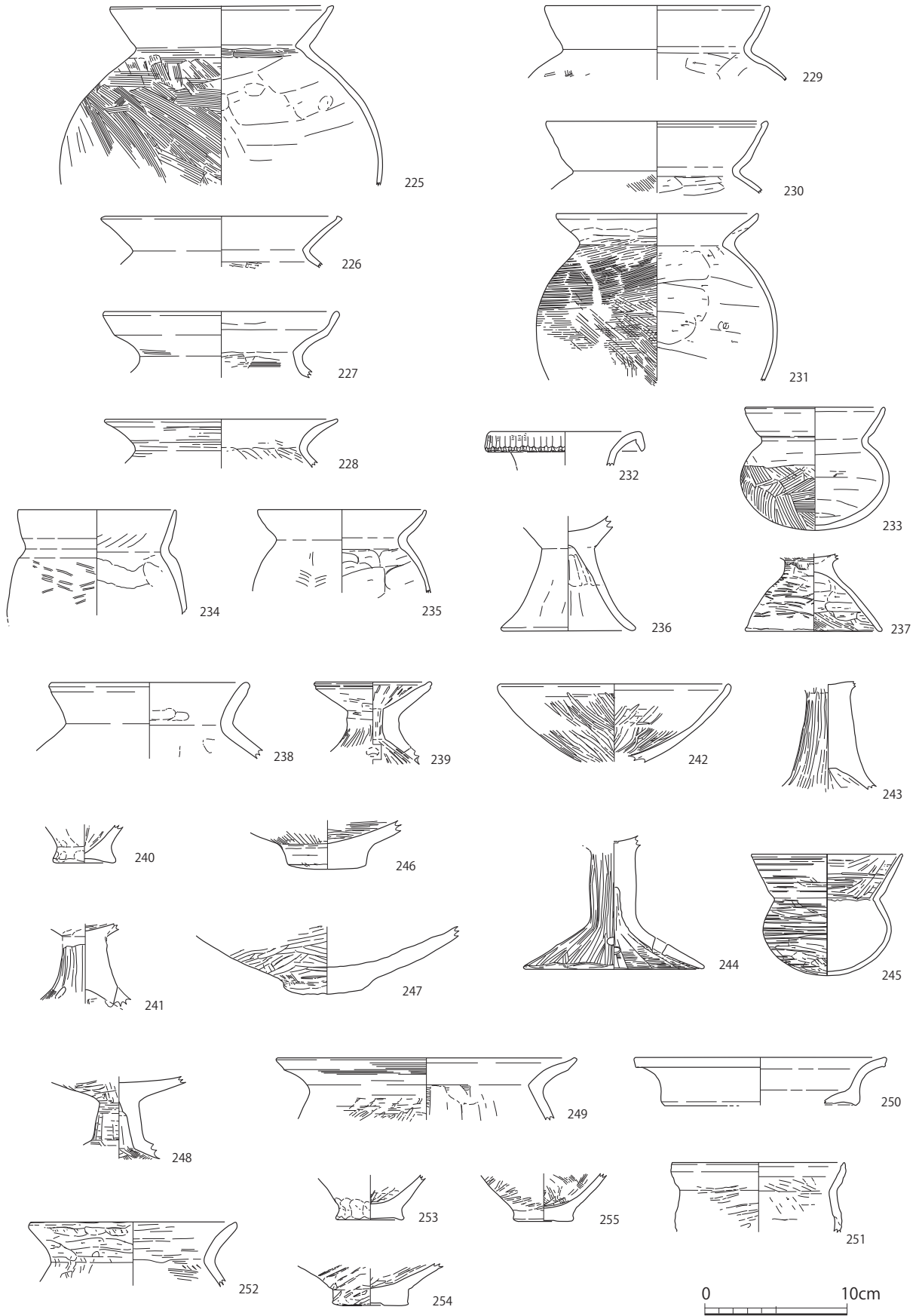
241は2-d区、水制である台形突出部の盛土から出土した高杯。通常胎土で、粗砂を多く含む。外面と杯部内面は太筋のヘラミガキ仕上げである。杯部内面に朱が付着する。

土盛303・304 流路内で確認した不定形の土盛である。性格は不明。規模は、土盛303が長2.5m、短2.0m、高さ0.4m、土盛304が長3.1m、短2.5m、高さ0.35mである。いずれもオリーブ黒色を呈した砂混じりシルト質粘土を積み上げたものであり、堅く締まる。補強のための心材を入れたり、木杭を打設することはない。遺構検出の段階で、頂部の中央から土器が出土した。これらの土器は、ベース土に含まれる細片とは全く異なる大きな破片で、時期も異なる。掘り方は未確認で、盛土の最終段階で埋め込まれたと考えられる。遺構の時期は、後に報告する245・248などから庄内期から布留1式までと考えておきたい。

検出段階で、洪水砂が土盛を回り込んで堆積する状況が確認できた。台形突出部と共に築造され、同様の機能があったとすれば、土手に流水が直接にぶつかることを回避したり、流速を弱める目的で設置された「水制」の可能性を想定しておきたい。今後の類似例の発見を期待したい。

出土遺物 242～245は、土盛303の盛土から出土した。242は椀形の高杯である。通常胎土、口縁端部ヨコナデ、杯部内外面とも太筋の縦方向ヘラミガキを施す。243・244は高杯の脚部である。粗砂を含む通常胎土。いずれも外面は縦方向のヘラミガキ、裾底面は横方向のハケ目、板ナデ仕上げである。245は検出段階に遺構の上面をいくぶん掘削して出土した小型丸底鉢である。口縁端部を外方に突出させる。色調は褐灰色を呈し、胎土はやや精良で白色の微細砂粒を含む。体部下半にヘラケズリ、その後体部全面と口縁部内・外面に横方向の細かなヘラミガキで仕上げる。体部内面ナデ。

246～248・252は、土盛304の盛土から出土した。246は突出した底部で、内外面ヘラミガキ仕上げである。247は遺構検出段階で遺構表面から出土したもので、底部を下にして据えられたような状況で出土した。壺底部と考えられる。通常胎土、外面は工具による粗いナデ仕上げ、内面は剥離で調整不明である。248・252は断割りのトレンチから出土した。248は高杯である。精良な胎土。体部外面にヘラケズリ、その後横方向の細かなヘラミガキ、内面は調整不明。脚柱部外面は縦方向の面取り、その後横方向の細かなヘラミガキ、内面はナデ、棒突き痕がある。裾部内面は板ナデである。252は甕である。口縁部は外面ケズリ気味の板ナデ、内面ヘラミガキ。体部は内外面板ナデ仕上げである。



第31図 洪水層・第3面水田・水田ベース土出土遺物

## 第4章 まとめ

以上の調査結果から、今回の調査地は、次のように変遷したと考えられる。

- 1) 第3面ベース土の形成時期は、庄内式甕を含まない段階で、庄内0式以前の弥生時代後期である。
- 2) 第3面の遺構から少数の土器が出土しているが、盛土から単体で出土するもので、それによって各遺構の時期を明らかにすることは難しい。水田の築造に伴う一連の遺構として概略を記す。大畦畔301の小型器台239から庄内期のいずれかに水田の築造がなされたと考えられる。土盛303の小型丸底鉢245、土盛304の高杯248は布留1式程度に位置付けられる。また、位置付けの難しい土盛303の高杯242～244や突出部の高杯241も布留式中頃までは下らず、布留式初頭までにおさまる。よって第3面の水田は、庄内期～布留初頭期に営まれたと考えられ、布留3式まで継続した可能性がある。
- 3) 第3面を覆う洪水層は、水田面に密着して出土した甕225から布留3式以降に位置付けられる。集落が再開されるのは、第2面の古墳時代中期になってからである。
- 4) 第2面では古墳時代中・後期の土坑等を検出している。これらの土坑からはI型式2段階からII型式3段階までの須恵器が出土している。土坑26は東に開く浅い微低地を利用した廃棄土坑と考えられ、出土遺物から周辺に5世紀中頃から6世紀前半の集落が存続していたと考えられる。それ以外の土坑の性格は不明である。

出土した須恵器には高杯型器台など装飾品もあったが、土師器では鏝付き羽釜やカマド片と思われる把手など日常使用される煮沸具も多く含まれていた。韓式系土器では、直線文タタキ目をもつ破片が数点出土しており、朝鮮半島西部とのつながりが想定できる。

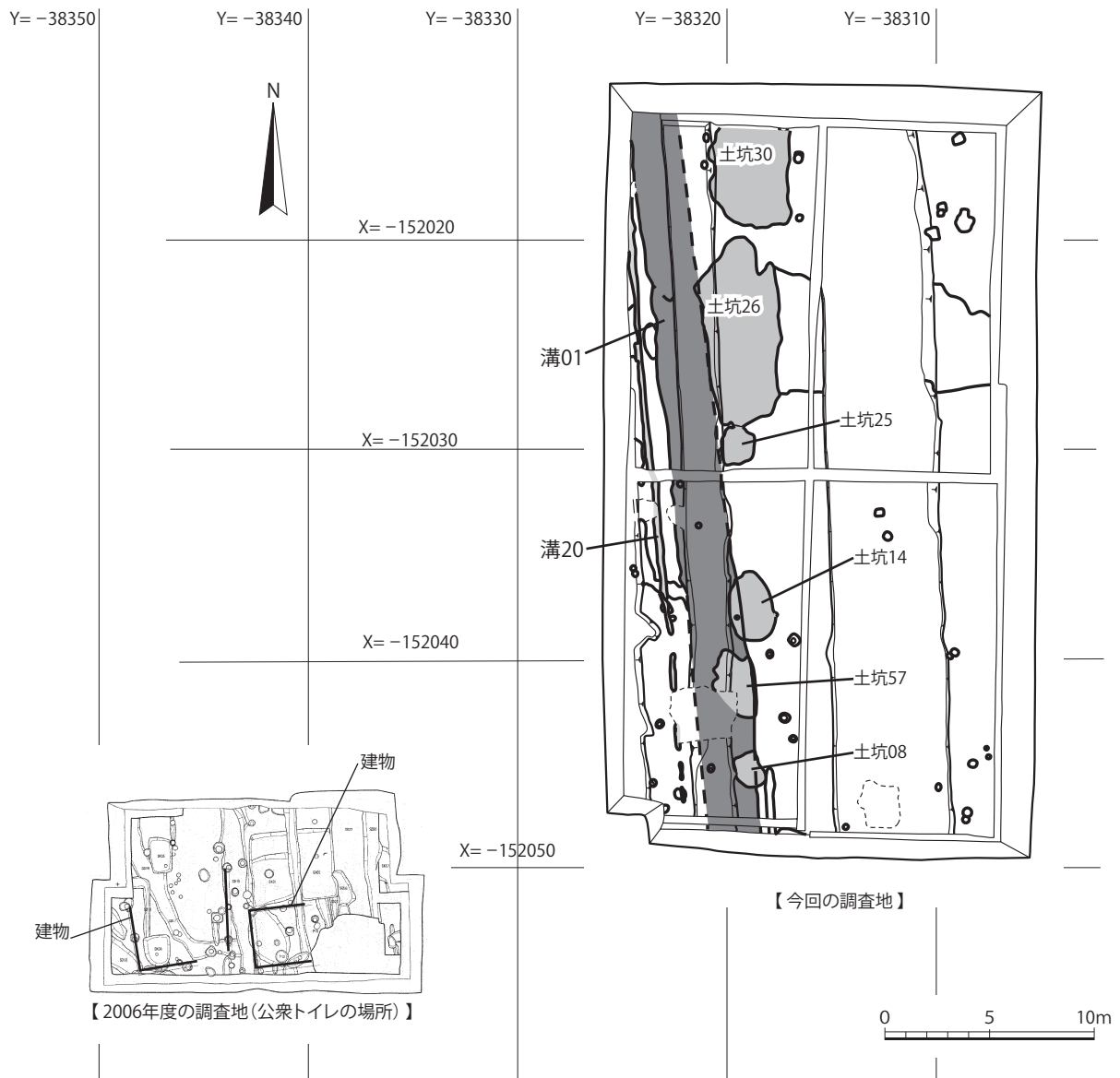
- 5) 第2面で検出した南北方向に走る平安時代の溝01は、屋敷地を囲む壕と考えられる。溝01の西側に平行して存在する溝20は、壕に付属する柵や塀の跡と考えているが、杭などの痕跡は確認していない。溝01の土層は、間に無遺物層をはさみ上層、下層に分かれる。各層の時期は黒色土器B類の出土の有無、そして土師器での字口縁皿の出土を目安として、黒色土器A・B類を含む上層は10世紀末から11世紀初頭、黒色土器A類のみを含む下層は10世紀後半から10世紀末と考える。

今回の調査区では屋敷地に該当する遺構は検出されていないが、2006年度に調査された調査地の西側15mに位置する公衆トイレ部分の調査で、南北方向に建てられた平安時代の建物が数棟検出されている（大阪府教育委員会2007『加美・久宝寺遺跡発掘調査概要』）。溝01はこの建物群を含む屋敷地を囲む方形の壕の一部であろう。

ここで2006年度調査区の詳細を見てみると、建物が検出されたのは、第4・5の2面で、第4面からは瓦器が出土している。しかし第5面からは出土量の多さにもかかわらず瓦器は1点も出土していない。検出レベルはT.P.+6.6～6.8mである。今回の調査区も溝01から瓦器は出土していないことから、溝01は2006年度調査区第5面で検出した建物群に伴うものであろう。これらの発見は、壕によって囲まれた区画に居住域が集中する、低湿地の集落のあり方を考える一助となると思われる。

- 6) 屋敷地が廃絶した後、調査地は近世に至るまで島畠などの耕作地として活用されていた。

第4章 まとめ



第32図 今回の調査地と2006年度の調査地、屋敷地と壕

参考文献

- (財) 大阪市文化財協会 1992 『長原遺跡発掘調査報告』 V  
 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社



# 圖 版



図版一 調査区(第二面)全景



(上が南)



図版二 土層断面



南壁断面(北から)



西壁断面(東から)







上層遺物検出状況(北から)



断面(南から)



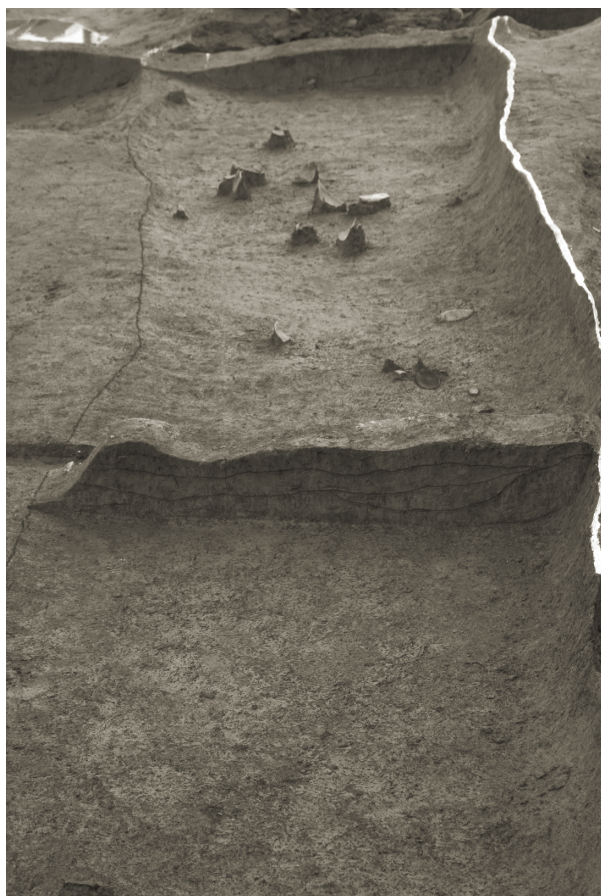
図版四 溝01遺物出土状況



上層(北から)



上層(南から)



下層(北から)

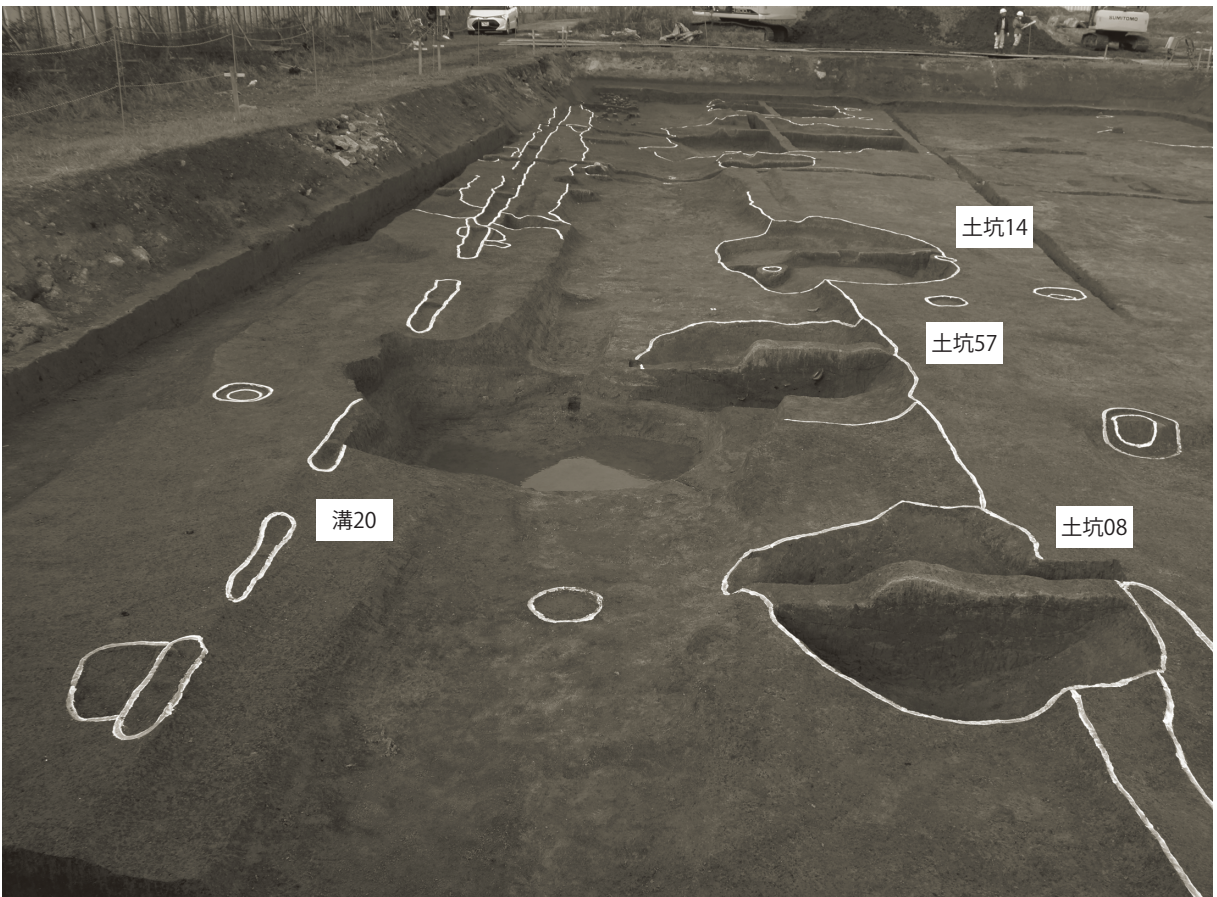


下層(南から)



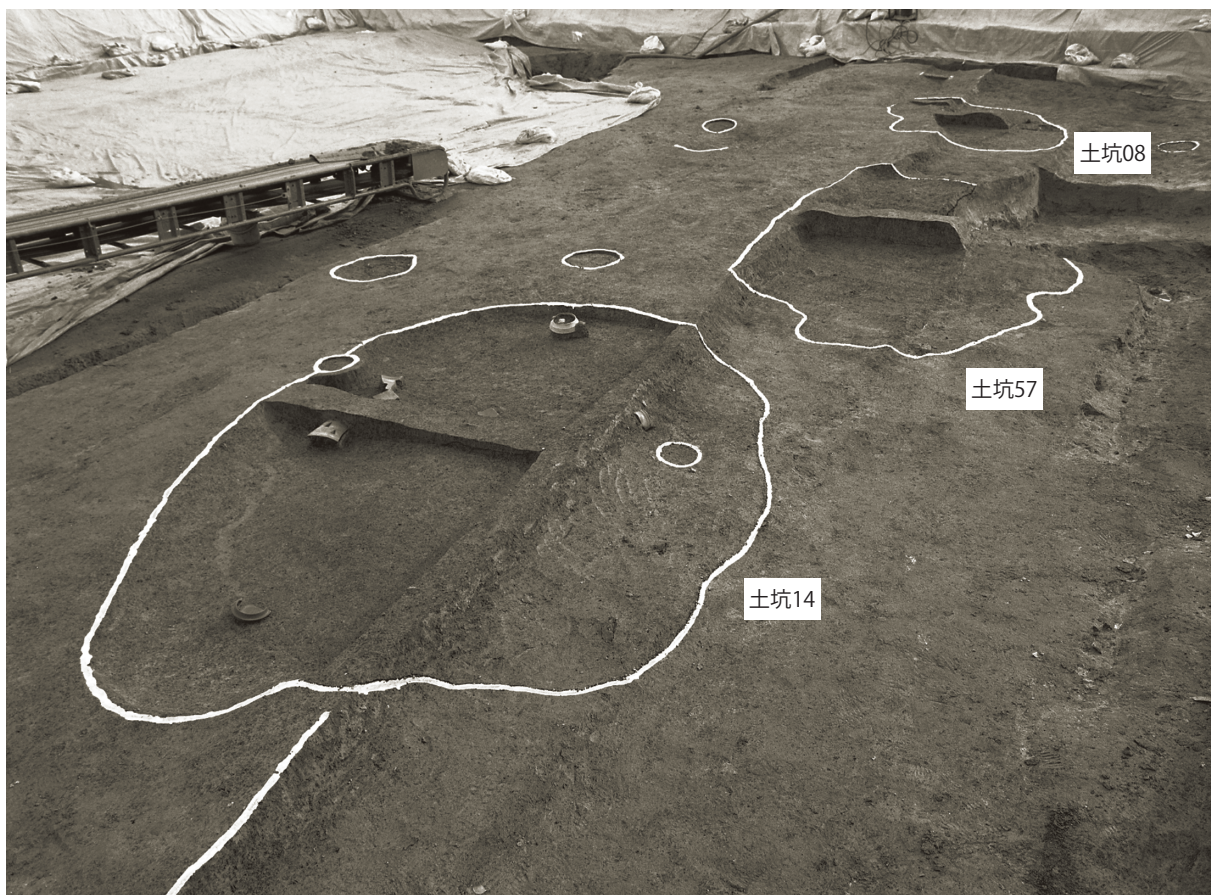


溝01下層遺物出土状況(左上・左下：緑釉陶器、右上：土馬、右下：黒色土器)

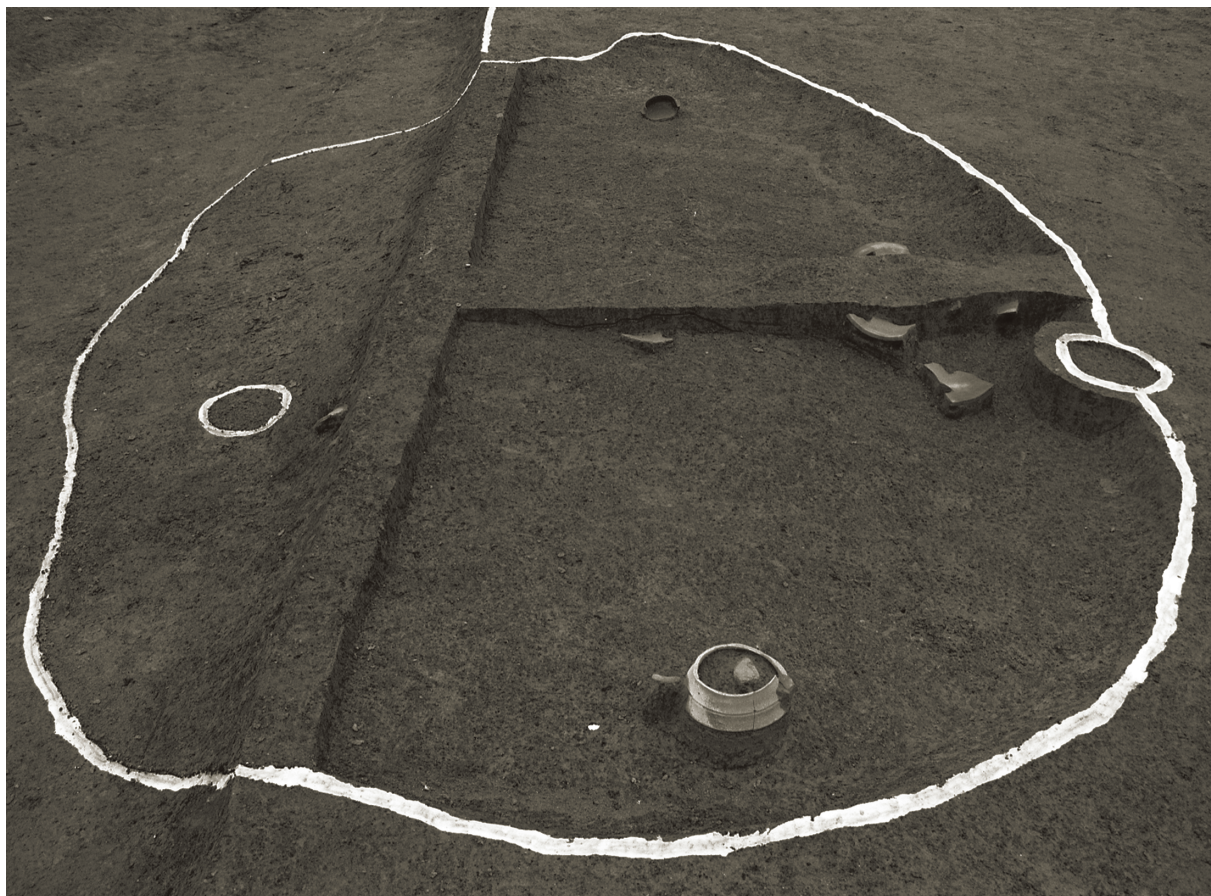


溝01、溝20、土坑08、土坑57、土坑14下層掘削状況(南から)





土坑14、土坑57、土坑08 掘削状況(北から)



土坑14(南から)





土坑57 遺物出土状況(南から)



土坑08 掘削状況(東から)





土坑30掘削状況、  
ピット32・33  
検出状況(東から)



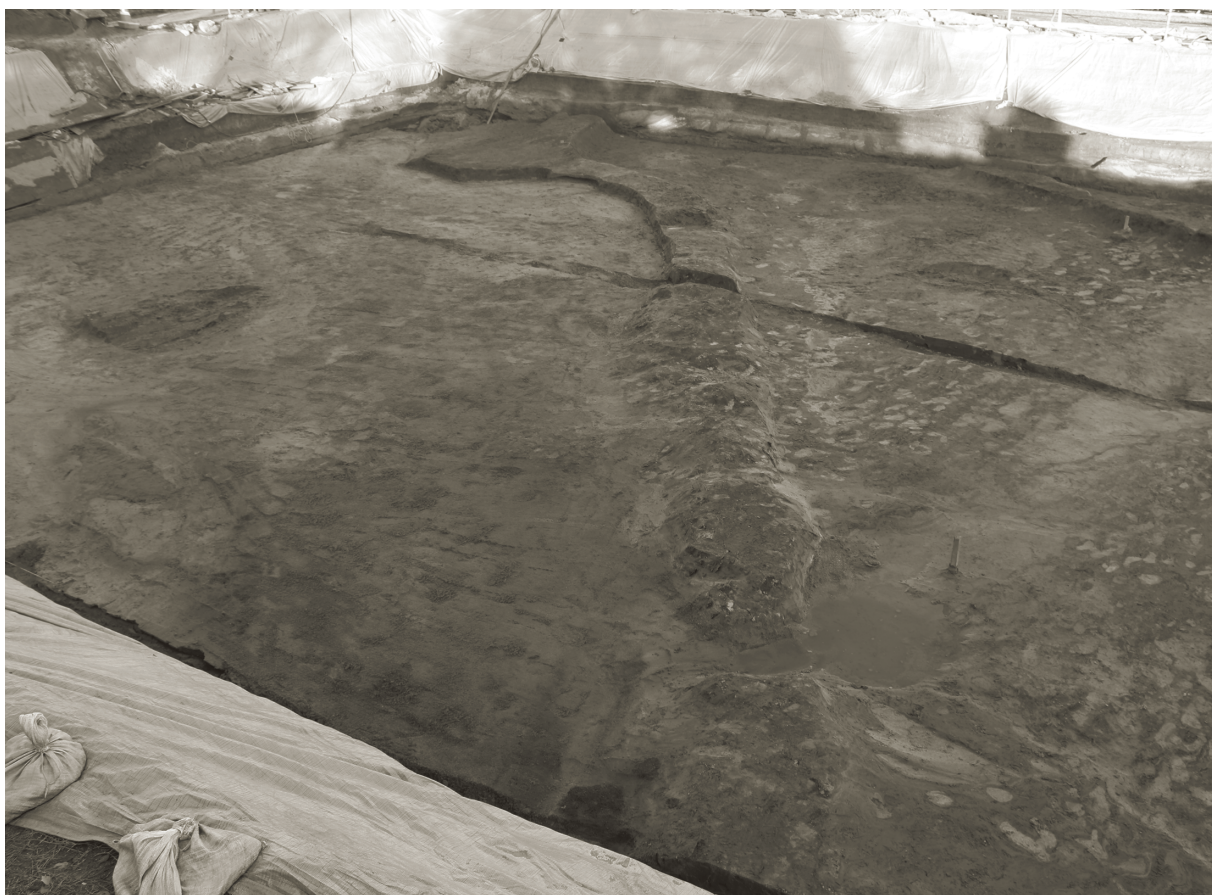
土坑61掘削状況  
(東から)



落込み26(土坑26)  
掘削状況  
(南西から)



図版九 調査区(第三面)全景



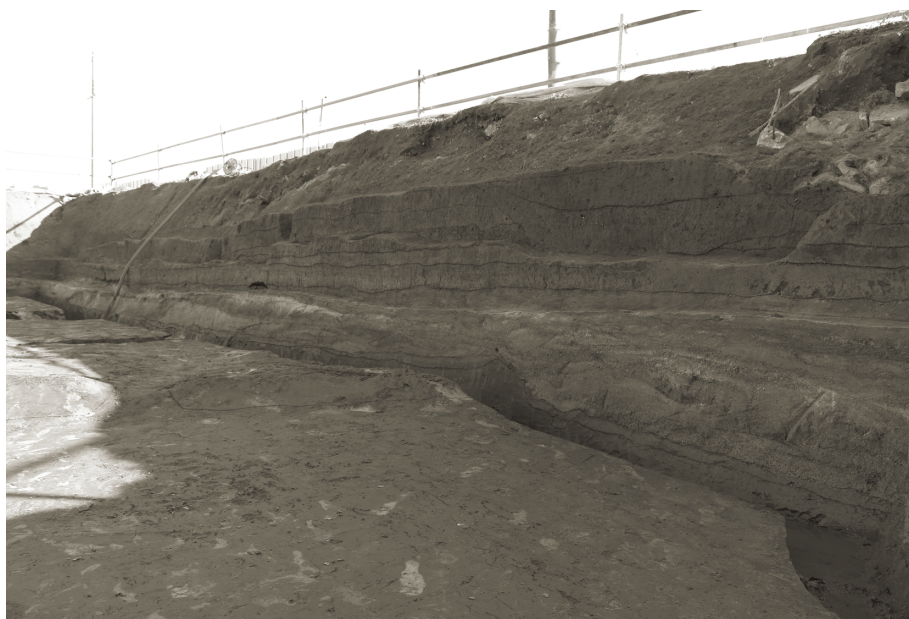
(南西から)



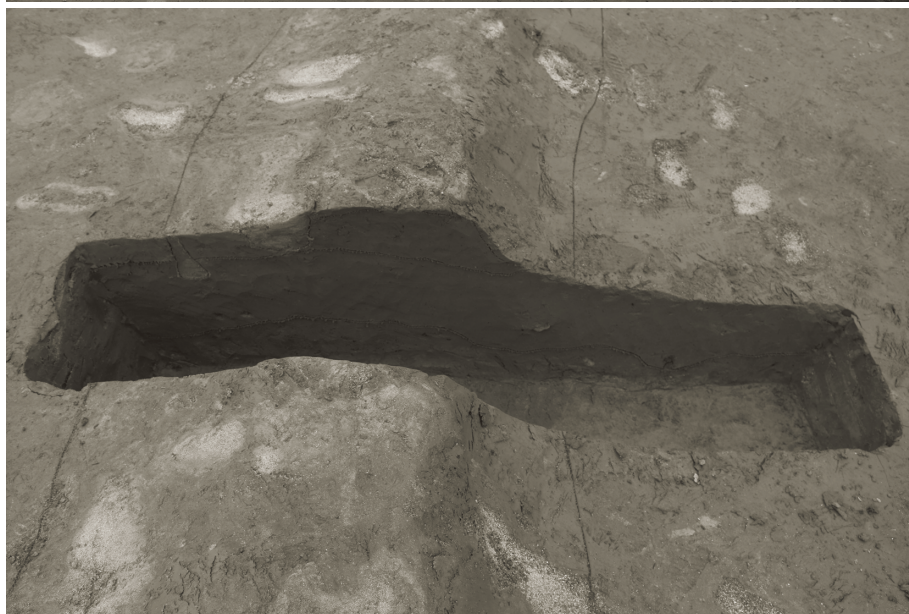
(南から)



図版一〇 土層断面・遺構



南壁断面  
(西北から)



大畦畔301断面  
(北から)



土手302  
(東から)

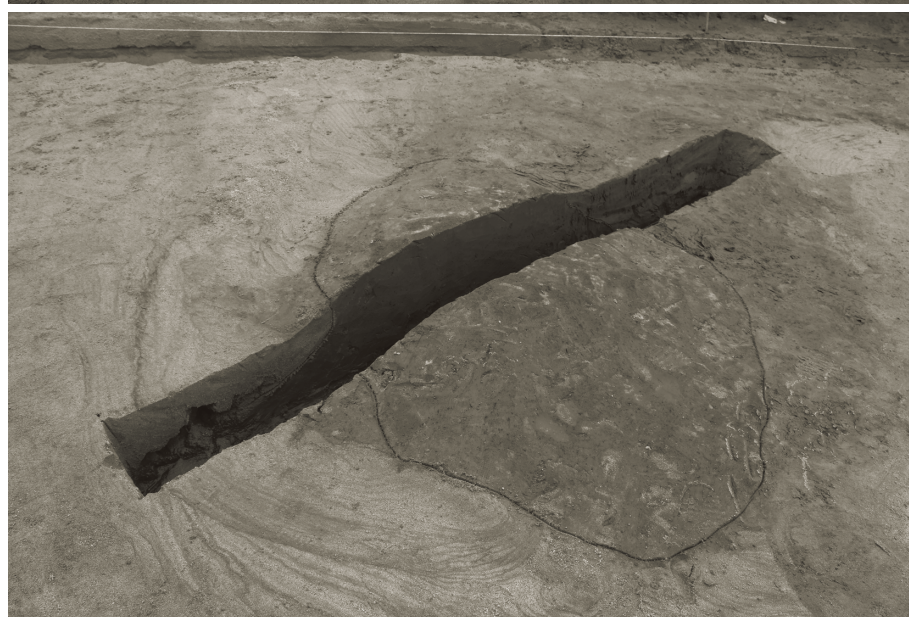




土手302突出部  
(西から)



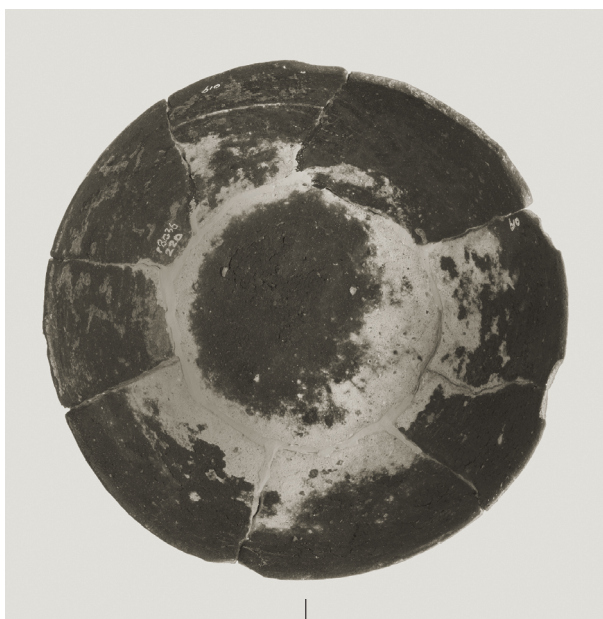
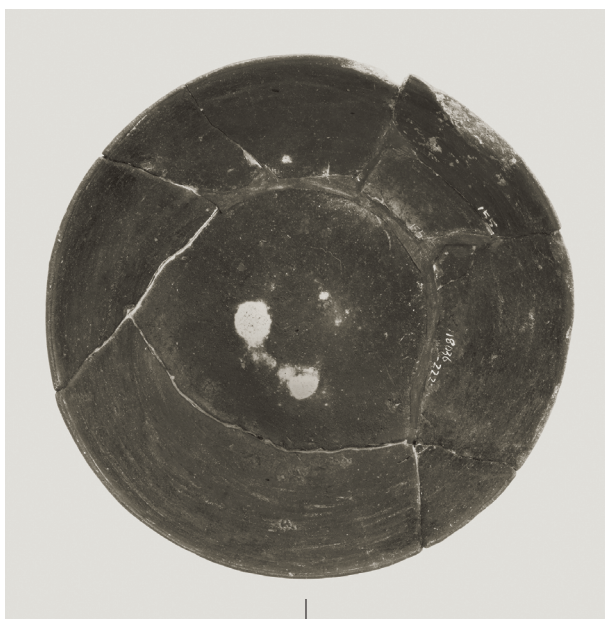
土盛303・304  
(北東から)



土盛303  
(南から)



图版二二 溝01上層出土遺物(1)



86



87



88



89





82



83



84



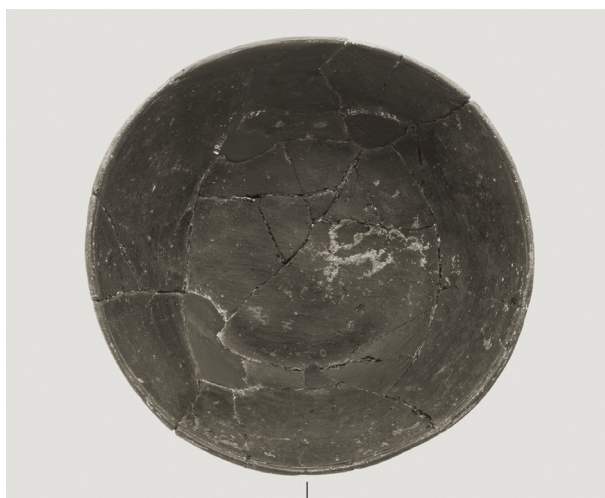
85



圖版一四 溝01上層出土遺物(3)







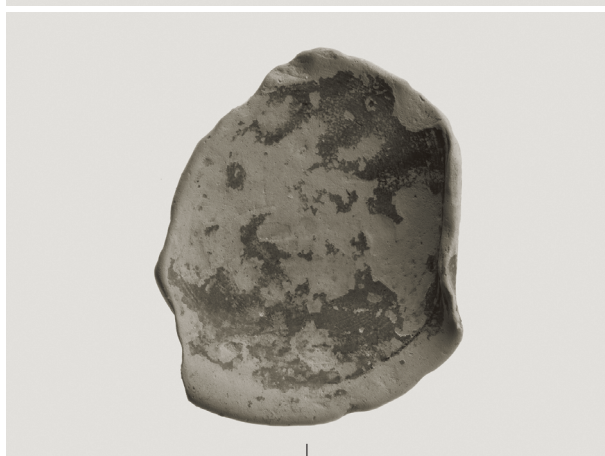
95



63



96



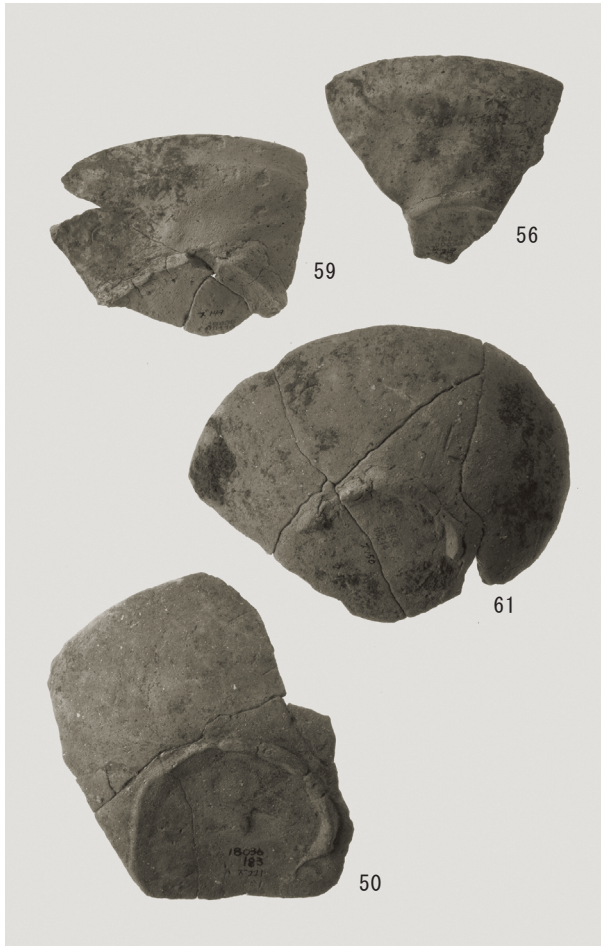
97



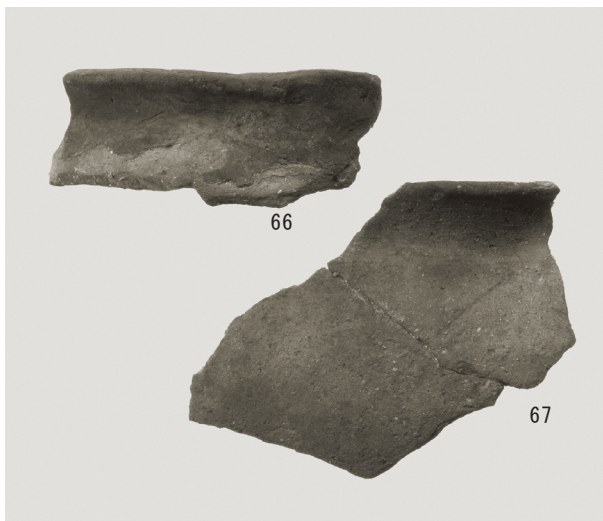
62



圖版一六 溝01上層出土遺物(5)









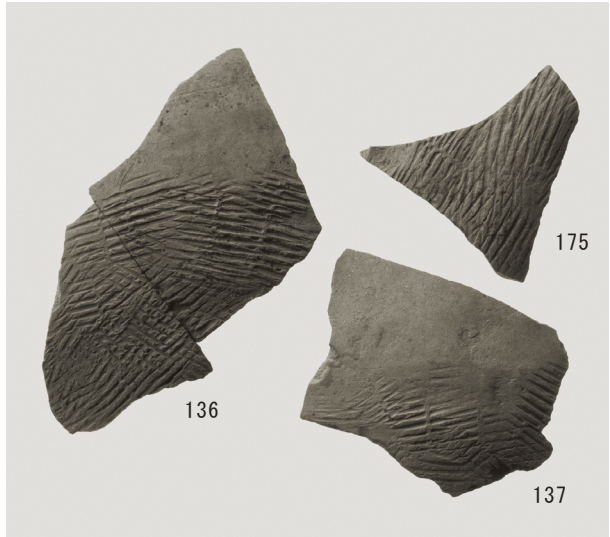
圖版一八 溝01下層出土遺物









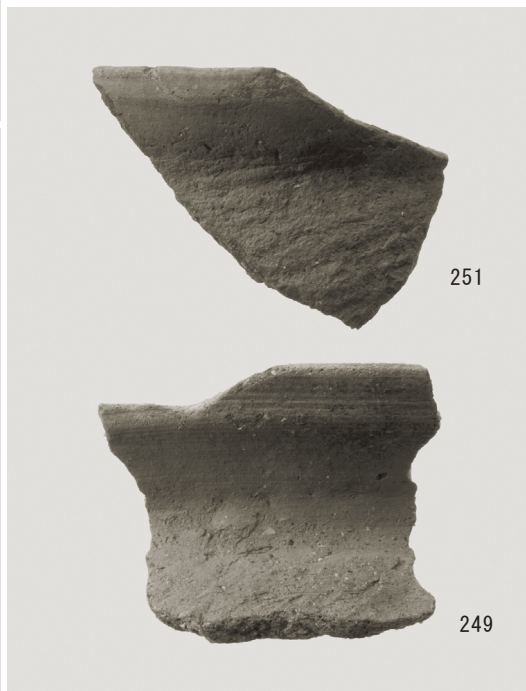


溝21 (136・137)・落込み26 (170・174・175・186・190・192・193)











## 報 告 書 抄 録

ふりがな	きゅうほうじいせき							
書名	久宝寺遺跡							
副書名	久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2019 - 3							
編著者名	山田隆一 藤田道子 石田尚子 井西貴子							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540 - 8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06 - 6941 - 0351(代)							
発行年月日	2020年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡	おおさかふ や おし 大阪府八尾市 にしきゅうほうじ 西久宝寺	27212	23	34° 37' 42"	135° 34' 55"	201811 ～ 201902	590㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
久宝寺遺跡	集落跡・ 水田跡	弥生時代 古墳時代 平安時代		土坑・溝・畦畔・土手		弥生土器・土師器・土師質土器・黒色土器・ 須恵器・青磁・土製品		
要約	<p>本書は、久宝寺遺跡において行われた発掘調査の成果を報告するものである。</p> <p>調査では、古墳時代前期の水田跡、古墳時代中・後期の土坑など、平安時代の屋敷地を囲むと考えられる壕とそこに投げこまれた大量の黒色土器を検出した。</p> <p>当地における土地利用の変遷並びに平安時代の集落の様相を把握することができた。</p> <p>特に、第2面で検出した屋敷地を囲む壕と推定される溝は、間に無遺物層を介在し上下二層に分かれ、下層は黒色土器A類だけを包含し、上層は黒色土器A類・B類をともに包含することが確認された。</p>							

大阪府埋蔵文化財調査報告 2019 - 3

## 久宝寺遺跡

—久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目  
TEL 06-6941-0351(代表)

発行日 令和2年3月31日

印刷 株式会社 カンプリ  
〒556-0025 大阪市浪速区浪速東1-2-5  
TEL06-7654-1190